「ハ行音の変化を考えなおす」

目次

1. はじめに　　　　　　　　　　　　　　　　　　　p2
2. ハ行音はどのように変化したのか　　　　　　　　p3
3. 『日葡辞書』のfは両唇摩擦音だったのか　　　　p3
4. ハ行頭子音を遡る　　　　　　　　　　　　　　　p5
5. 「皆加唇音」の記述はΦを意味するか　　　　　　p8
6. ヒはpi→Φi→hi→çiと変化したのか　　　　　　p10
7. 「声立て」の違いとは何か　　　　　　　　　　　p13
8. ハ行頭子音はどんな特徴をもっていたのか　　　　p16
9. 擬声・擬態語のpは継続的に存在したのか　　　　p17
10. ハ行転呼音の変化を疑う　　　　　　　　　　　　p21
11. 「母」の変化を考えなおす　　　　　　　　　　　p23
12. ハ行語頭と語中の変化は違ったのか　　　　　　　p25

【注】　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 p31

【引用書など】　　　　　　　　 　　p39

1. はじめに

　今回の更新のテーマを「ハ行音の変化を考えなおす」にした経緯を記しておきます。「中期朝鮮語の音価を考える（その３）― 中古中国語の舌内入声を考える―」を2017年5月24日に更新した後、すぐに入声（促音）と関係する撥音について書き始めました。そうこうするうちに連濁についても書きだし、気がつくと秋近くになってしまいました。しかし撥音や連濁についてこのまま書き続けても来春の更新には間に合わないだろうと思うようになりました。
　ところで中世に「チ」はti→tʃi、「ツ」はtu→tsuのように変化したとみられています。また古くは「」が「ツイタチ」となるイ音便、「ヒテ」が「オモウテ」（ともに馬淵　昭和46：84）になるウ音便が起こっています。そして撥音や連濁について書いているうちにこのような語尾や語頭などのイとウにはある特別の関係がみられることに気づきました。そこで今回のテーマはこれにしようと新たに書きはじめました。しかし年も明け、書いているうちに「イとウの相関について考える」のテーマも5月までには書きあげられないと思うようになりました。そこでそのかわりとして「ハ行音の変化を考えなおす」というテーマで書くことにしたのですが、書いているうちに2016年1月12日作成のhagyuonというファイルがあることに気づきました。このファイルは時期的に考えると、「J.中期朝鮮語の音価を考える（その１）―初声・終声字の問題について考える―」（第四十四回2015年11月16日更新）のすぐ後に書はじめたもののようですが、私自身全くこのファイルの存在を忘れていました。そこで春の更新まで時間も少ないので、このすっかり忘れていた「ハ行音の変化を考えなおす」の記述を校正して今回の更新にしようと考えました。11節までは通説にたいする疑問について考察したもので、12節は今回突然思いついたアイディアについて書いています。本当は12節から新たに書きなおすのがよいのですが、過去の考えもHPを見ていただいている皆様の参考になるだろうと思い、あえて今回のテーマとしました。更新までの時間も少なく、考察の粗雑さ、文意の乱れ、誤記など多くあると思いますが、この点お許しください。
　次回の更新は現在中断している「ハ行音の変化を考えなおす」（続）を考察することにします。
　　　　　　　　　　　　　　　2018年5月24日　　ichhan　　特に記す

1. ハ行音はどのように変化したのか

ハ行音の変化は語頭と語中でその変化が違っています。語頭は「「（い）現代、琉球や奄美の諸方言に、ハ行子音のpが認められる事（注1）、（ろ）内地諸方言でも、ハ行子音に対する濁音が破裂音bである事」等々、いずれも古代日本語のハ行子音が、唇的破裂音pだったことを、推測」（奥村　昭和47：129）できるものです。またキリシタン宣教師ロドリゲスの『日本語小文典』（1620年刊）では、ハ行は「Fa（は）、Fe（へ）、Fi（ひ）、Fo（ほ）、Fu（ふ）」（J. ロドリゲス　上巻1993：56）と記述されています。そこでロドリゲスが記述したFは唇歯摩擦音のfではなく両唇摩擦音のΦであったとみられています。そして現在のハ行は[ha][çi][Φɯ][he][ho]（ただし、ɯは平唇の[ɯ]）となっています。そこで「ハ行頭子音は、文献時代以前に両唇破裂音の[p]であったが、すでに奈良時代には両唇摩擦音の[Φ]になっており、さらに江戸時代に入って声門摩擦音の[h]に変化した」（小松　昭和56：249）とみられ、これが通説となっています。また語中は「この**ハ行転呼**というのは語頭以外の行音が行音に発音するように変化した現象で、カファ（川）がカワ、コフィ（恋）がコヰ、マフェ（前）がマヱ、カフォ（顔）がカヲとなるである。母音の間にはさまれた両唇摩擦音の[Φ]の緊張がゆるくなって[w]に変った」（秋永　1990新装版：82）とみられ、これが通説となっています。

そこでハ行の頭頭と語中尾の変化は、次のようにまとめることができるでしょう。

ハ行頭子音：pa/pi/pu/pe/po→Φa/Φi/Φu/Φe/Φo→ha/çi/Φu/he/ho

ハ行転呼音：pa/pi/pu/pe/po→Φa/Φi/Φu/Φe/Φo→wa/wi/u/we/wo→wa/i/u/e/o

＊p：無声両唇閉鎖音/p/。Φ：無声両唇摩擦音/Φ/。ç：無声硬口蓋摩擦音/ç/。h：無声声門摩擦音/h/。w：半母音/w/。母音：/a/,/i/,/u/,/e/,/o/。u：平唇のウ（/ɯ/）。以下、uで代用。
＊以下、頭子音の変化はp→Φ→h、転呼音の変化はp→Φ→w/Vと略記します。

1. 『日葡辞書』のfは両唇摩擦音だったのか

前節で紹介したように江戸時代極初期のハ行の語頭子音はΦとみられていますが、この通説にたいしては次のような疑念がだされています（外山　昭和47：195）。

「（上略）語頭ハ行音は、もっぱら

　Fato(鳩)　Fito（人）
　　Fuyu(冬)　Febi（蛇)　Foca(外)
　　　＊筆者注：上の5語は『日葡辞書』（土井ほか　1980：213,246,289,219,255）。

のごとく、fで表わしている。ただ、ポルトガル語には喉音のhがないのであるから、近似的にf（ポ語のf は唇歯音）を用いたのであるかも知れない。しかし、同時代の他の資料などからして、このfもやはり両唇音（筆者注：摩擦音のΦ）を表わしているものと見るべきであろう。もっとも、例のロドリゲスが、その文典の中で、このfに関する注記を全くしていないのは、他の音のばあいにくらべて若干奇異な感じがしないでもない。」（下線は筆者）。

またロドリゲスと同時代人のコリヤードの『日本語文典』（1632年）にも次のような記述がみられます（コリヤード　昭和9：6）。

「字母fは日本の或る地方ではラティン語に於けるやうに發音されるが,他の地方では恰も不完全なhの如く發音される。然し乍ら,經驗に依つて容易に知られるであらうが,或るものはfとhとの中間の音であつて,齒と唇とは完全にではないが幾分重ね合せて閉ぢ

られる。例へば,．」（下線は筆者）。

そこで外山氏は先の疑念とあわせて、次のような考えをだされています（外山　昭和47：196）。

「ただ右（筆者補：上）の記述では、日本語のハ行頭子音を軽い唇歯音（ヨーロッパ語と同じ）だとしている。ロドリゲスが日本語のハ行子音について何ら注記をしていない点（前述）を考えあわせると、あるいはこの時代軽い歯音的要素が日本語のハ行子音にあったのかも知れない。しかし、そうであるにせよそれはどのみち極めて軽微なものであったであろう。」

ところで前のコリヤードの記述は1600 年頃の語頭のハ行子音がfではなくΦであり、そのΦがhに変わりつつあった事実を示す記述であるとして読まれています。しかしfについてロドリゲスはまったく注記をしていず、コリヤードもある地方としかいってはいませんが、ラテン語のfのように発音されると記述しています。そうであればコリヤードが記述するfは通説のようなΦではなく、唇歯摩擦音のfであったとみるのが自然な読み方でしょう。しかし私たちはfやv(fの有声音)の発音に困難を感じ、filmやviolinを「フィルム」（ΦirumuよりはΦuirumu）や「バイオリン」（baioriɴ：ɴは撥音）のようにいつでもΦやbで発音しています（注2）。そこでこのような私たちの発音の癖を考えれば、唇歯摩擦音のfが江戸時代初期に存在していたと考えるのは難しいと思われます。
　ここで本土方言から琉球方言に目を転じてみると、この珍しいfが宮　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　古方言にみられます（中本　1990：221,223）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | ハ | ヒ | フ | ヘ | ホ |
| 語例 | 花 | 昼/髯 | 舟 | 屁 | 骨 |
| 方言 | hana | psïsuma（昼） | funi | pi: | puni |
| 池間島方言 | hana（注3） | çigi（髯） | funi | çi: | Φuni |

＊ï： ïの無声化音（ïの下に小丸）を下線で代用。

＊平良方言：平良市（現宮古島市）の方言。池間島は宮古島の西北にあり、宮古方言に属す。

このように池間島方言ではフはfu、ホはΦuと区別され、Φだけではなくfも存在します。そこで現在の池間島方言にfが存在することから1600年頃の本土方言にもfが存在したとみて、p→f（→Φ）→hのような変化を考えることは可能かもしれません。しかしその他の琉球方言や本土方言に全くfがみられないことから1600年頃のハ行頭子音がfであったと考えるのは難しいと思われます。

ではコリヤードの「fは日本の或る地方ではラティン語に於けるやうに發音されるが、・・・」との記述はどのように解釈すればよいのでしょうか。

1. ハ行頭子音を遡る

前節ではコリアードが記したfをΦとみることには疑念があることをみました。そこで時代を遡ってハ行頭子音がどんな音であったのかをみていくことにします。

少し時代を遡ると、明初陶宗儀の『書史會要』（1376年までに成立）には日本僧克全から聞いた「いろは」にたいする音注が次のように記述されています（京都大學文學部國語学國文学研究室編　昭和40：73）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| は | ひ | ふ | へ | ほ |
| 法平声又近排　（注4） | 非 | 蒲又近夫 | 別平声又近奚近靴　 | 波又近婆　 |
| 法fa（fah/ ba） | 非fei（fi） | 夫fu（fu） | 奚his（-）　靴hsüe（hsü） | 波po,pho（pou） |
| 排phai（ba） |  | 蒲phu（bu） | 別pie（bieh） | 婆pho（bou） |

＊中・下段の表は筆者が追記（ローマ字表記はともに有坂　昭和32：582）。

＊中・下段の左項は北京語、（　）内は寧波音。中段は清声。下段は濁声。

＊p‘は有気音、phで代用。

そこで橋本氏は「多分、日本の波行子音が兩唇音のF（筆者注：両唇摩擦音Φ）であって、齒唇音である支那のf音（筆者注：唇歯摩擦音f）とも正しくは一致せず、兩唇音のpやp‘（筆者注：ph）とは、違ひはあるが、また却つて性質の似た點もあるので、いろいろ違つた漢字の音を併せ擧げて日本のFの發音をあらはさうと企てたのであらう。（以下、略）」（橋本進吉　1950：34－5）とみられました。

さらに遡り鎌倉時代には宋の羅大経が日本僧安覚から聞いた日本語の発音を記した『鶴林玉露』（1248－1252年編）があります。「語頭の波行音はフデ（筆）を「分直」と書いたものしか見えないが、この「分」（筆者注：下注）もfではじまる語である」（注5）（橋本進吉　1950：35）ことから、橋本氏は当時のハ行子音をΦと推定されました。しかし『日葡辞書』のfをΦとみることに疑念があるので、この「分」をΦとみることには疑念がわくでしょう。
　＊幫母文韻3等平声fïuən（藤堂・小林　昭和46：64）。

もっと遡り平安時代末の『悉曇口伝』（東禅院心蓮1181没）には次のような記述がみられます（馬淵　昭和46：72,73,74の写真）。

「　ハノ穴事

以二脣内分ヲ一上下合レ之、呼レa而終開レ之則成二ハノ音一。自余如レ上。

マノ穴事

以二脣ノ外分ヲ一上下合レ之呼レa而終開レ之則成二マノ音一。自余如レ上。」

　＊aは梵字の代用。

上の記述を橋本氏は次のように解釈されました（橋本進吉　1950：36－7）。

「波行子音と麻行子音との差異は、唇の内方を合せるのと、その外方を合せるのとだけに存するのである。然るに、波行子音をp音であるとすれば、その上下の唇を合せる場所は、m音の場合とさほど差異があるとは考へられない。されば、波行子音は、やはり兩唇音のF（筆者注：pやfではなくΦ）であつたのであらうとおもはれる。F音の場合は、mよりも、もつと内側（後方）で唇を合はせるのが常であるからである。」

上の「脣内分」「脣外分」は唇を合わせる場所の記述とみられます。そこで橋本氏は「脣内分」は「脣外分」のmやp/bよりも「もつと内側（後方）」で唇を合わすこととみて、Φであるとされました。Φは唇をまるめて息を発する音であって、mやp/bのように唇を合わせて発音はしません。だから唇を合わせる場所とみるかぎり、Φを「脣内分」とみることはできません。しかし今は橋本氏の考えにしたがってΦは「唇が合っている」（→第10節）と考えます。そしてmやp/bを「脣外分」と考え、Φとみた「脣内分」と「脣外分」の唇の合う場所を比べてみると、そこにさしたる違いはみられません。しかし心蓮はハ・マ行の違いを「脣内分」「脣外分」と用心深く記述しています。そこで「F（筆者注：Φ）の場合は、mよりも、もつと内側（後方）で唇を合はせるのが常であるからである。（略）「上下合之」と云つても決して事實に背かない。ただ、説明が精密でないだけである。」（橋本進吉　1950：37）といってしまうのは少々強弁ではないでしょうか。このようにみてくると「脣内分」はΦであるという、橋本氏の読みには疑念がわいてくるでしょう。

さらに遡り、慈覚大師円仁が在唐中（平安時代初期）に梵僧の寶月三蔵より学んだ梵字の発音をしるした『在唐記』に次のような記述があります（橋本進吉　1950：37－8）。

「（pa）唇音、以本郷波字音呼之。下字亦然、皆加唇音

（pha）波、斷氣呼之

　（略）しかし、こゝに注意すべきは、その下にある「皆唇音を加ふ」といふ一句であつて、特にかやうな注意を加へなければならないのは、日本の波字の音がpaでなくFa（筆者注：Φa）であつた爲であつて、輕い兩唇音Fを重くしてp音に發音させる爲に、この一句を加へる必要があつたものと考へられる。この推定をたしかめるのは、こゝに引用した文にすぐ續く次の文である。

（ba） 以本郷婆字音呼之、下字亦然

（bha）婆、断気呼之

ba、bha共に日本の婆の字の音に呼ぶといふのであるが、この婆はなんと發音したかといふに、梵字vaの條に

（va）以本郷婆字音呼之、向前婆字是重、今此婆字是輕

とあつて、vaの場合の婆はbaの場合の婆に比して輕いといふのであるから、婆の日本の發音は、後世と同じくbaであつたと見るべきである。さうしてpaの場合には、波と呼ぶと云ひながら、特に「唇音を加ふ」と註し、baの場合には婆字の音に呼ぶとばかりで、何等の註をも加へてゐないのを以て見れば、日本の婆は正しく梵字baの音に相當するが、波は梵字paの音とは幾分の相違があるのであつて、婆がbaであるに對して、波はFaであつたと認められる。かやうにして、語頭の波行子音は、平安朝初期に於てもやはりFであつたと推定せられるのである。」

＊（　）のまえの梵字は省略しました。

この見事な解釈によって平安時代初期のハ行頭子音はΦとみることができ、これが通説となっています。
　さらに遡ると西晋の陳寿（233- 297年）の『魏志倭人伝』には「巴・卑・不・柄・百」の5種の字がみられ（森博達　昭和57：186の表8）、これらはすべて全清幇母字（通説はp）です。そして約300年後の「『切韻』（601）の反切においても, <脣音の軽重>はなお分離されておらず」（注5）（水谷　昭和42：110）という状態であったことから、3世紀末の日本語のハ行音はpであった蓋然性が高いとみることができるでしょう。

1. 「皆加唇音」の記述はΦを意味するか

前節では江戸初期のキリシタン資料から3世紀末の魏志倭人伝の時代まで遡ってみました。そのなかでも特に問題になるのは『在唐記』の「（pa）唇音、以本郷波字音呼之。下字亦然、皆加唇音」の解釈（注6）です。

そこで通説に異論をとなえられた服部氏の考えを次に紹介することにします（服部　昭和51：21－2）。

「（略）唇歯音の[f]は堅い上顎門歯を使って鋭い摩擦音を楽に出す経済的な音であるのに対し、両唇音の[Φ]は軟い両唇を使ってそれらに力を入れつつ鋭くない摩擦音を出す不経済な音であるから、シナ語におけるように[f]に変化するか、首里方言におけるように[w]/’w/に対する無声音[Φ]/hw/として保持されるのでない限り、長持ちのしない音である。しかるに、室町末期の語頭のハ行子音は[Φ]だったと考えられ、かつ構造的見地から単一子音音素と認められ、/hw/とは解釈できないのだから、それより八百年も前の奈良時代には、少なくとも語頭ではpであったに違いない、というのが私の持論である。慈覚大師の観察した梵字のpが、例えば国頭郡今帰仁与那嶺の仲宗根政善氏の喉頭化無声無気の[p’]のように両唇の閉鎖に力のはいる音であり、当時の日本語のハ行子音が同氏の非喉頭化無声有気の[p‘]のように破裂音が弱く且つそれより気音のずっと短い帯気音であったとすれば、大師は当然その差異に気付き、梵字pの発音に対し、「以本郷波字音呼之、・・・・加唇音」と記述したであろう。この推論が正しいとすれば、琉球諸方言の保持するp-音は、日本祖語を八世紀以前に想定する根拠にはなり得ない。（以下、略）」

＊以下、喉頭化無声無気音はpʔ（服部氏のp’）、非喉頭化無声有気音はph（服部氏のp‘）、唇歯摩擦音はf、両唇摩擦音はΦとします。

前半の記述は17世紀初頭の『日葡辞書』にΦがみられ、その「Φは長持ちしにくい」性質を持っているので、「それよりも八百年も前の奈良時代には、少なくとも語頭では（筆者補：Φではなく）pであったに違いない」との服部氏の表明です。後半の文章には馴染みのない無気喉頭化音pʔと非喉頭化有気音phとの違いが述べられていて、文意は難解です。

そこで先に無気喉頭化音と非喉頭化音の違いがみられる沖縄久高島方言（注7）を次にみてみることにします（中本　昭和58：49－50）。

「久高島の方言特色（2行省略）

（1）無気喉頭化音がある。たとえば,ハ行,タ行,カ行で次のようである。

pʔi:（火）　pʔun（舟）　tʃʔi:（乳）　tʔiki（月）　kʔinu：（昨日）　kʔumu（雲）

これらは,本来i,uの狭母音シラブルで起こっている現象である。

（2）有気音のpΦがある。このp音は閉鎖から破裂へ移行するとき,口腔の呼気圧が極度に弱い。したがって破裂のきこえが弱く,Φに近く聞こえる。口もとを見ないとΦと思ってしまうほどである。

pΦi:（屁）　pΦun（骨）

この音は,先の「火」や「舟」とminimal pair（最小対立）をなしている。（以下、略）」

このような対立は次のように琉球各方言にみられます（中本　1990：212,210, 212, 214,219,221,224,225より作表）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 語例 | 無気喉頭化音pʔ | 非喉頭化音 |
| 狭母音i相当 | 狭母音u | 広・半広母音 |
| 奄美 | 喜界島塩道方言 | pidʒi（肘） | pʔunï（舟） | pana （花） |
| 沖縄 | 名護方言 | pʔiru（昼） | pʔuni（舟） | pana: （花） |
| 久高島方言 | pʔigi（髯） | pʔun（舟） | pΦaku（箱） |
| 伊江島方言 | tʔidʒi（髯）（注9） | puju（冬） | pana: （花） |
| 首里方言 | Φiru（昼） | Φuni（舟） | hana （花） |
| 宮古 | 方言 | psïsuma（昼） | funi（舟） | hana（花） |
| 八重山 | 小浜方言 | psïsuma（昼） | Φuni（舟） | pana（花） |
| 与那国島祖納方言 | tsʔu:ma（昼） | nni（舟） | hana（花） |

＊小浜方言のï,u,a,n：それぞれの母音・鼻音の無声化音（ローマ字の下に小丸）の代用。

このように琉球方言には無気喉頭化音pʔと非喉頭化音ph（あるいはpΦなど）の違い（注8）がみられます。そこで服部氏はこのような破裂の強弱によるpʔとphの違いを考えて、古代大和方言のハ行子音は破裂のやわらかいphであったと考えられました。そして当時のハ行頭子音がphであれば、円仁は当然そのpʔとphとの差異に気づき、梵音paにたいして「加唇音」の記述を加えたであろうと服部氏は考えられました。そこで九世紀半ばの本土方言のハ行頭子音がphであったとすると、現在の琉球諸方言にpがみられるからといって（つまり琉球諸方言の（ph→）pが九世紀以後の出現かもしれず）そのpが日本祖語のpを継承しているとはいえないとして、「日本祖語を八世紀以前に想定する根拠にはなり得ない」と考えられたのが後半の文意と思われます（筆者自身、この後半の文意は不分明です）。phが中世にも存在したと考えれば、phの気音が消失してpに変化したと考えることで擬声・擬態語のpが中世より出現していること（→第9節）をうまく説明できるでしょう。しかしこの服部説にも難点はあります。『在唐記』には梵語の有気音pha字にたいして「波、斷氣」（馬淵　昭和46：64の写真）の記述がみられます。そこで当時のハが「非喉頭化無声有気の[p‘]のように破裂音が弱く且つそれよりずっと短い帯気音であったとすれば」（服部　昭和51：22）、円仁は「波、斷氣」（pha）の注記をしたと考えるのが自然ではないでしょうか。（ただし、服部氏は「ずっと短い」と書かれているので、phaとは少々違う音のようですが）また当時のハの頭子音がphやΦでなく、Φに近く聞こえる久高島のようなpΦ（両唇破擦音）であったと考えても、唇音退化とは逆のpΦからpへの変化は難しく、中世のpの新生（→第9節）を説明することは難しいと思われます。

1. ヒはpi→Φi→hi→çiと変化したのか

次はヒの変化にたいする疑問です。現在のヒは[çi]、フは[Φɯ]と発音します。そこでフはpu→Φɯと変化したあとも母音ウの影響でΦɯにとどまり、ヒは母音イの影響で口蓋化を起こしてΦi→hi→çiのように変化したとみる考え（小松　昭和56：253）があります。しかしヒは本当にhi→çiのように口蓋化を起こして現在のçiになったのでしょうか。

この問題を考えるために**江戸初期の次の記述が参考になります**（福島　1990新装版：309）。

「コックスは「箱根（山）」に対して、Faconiamaと記し、また、Haconey とも記している。ファフィフゥフェフォの中、ファにはハとなるようなものがあったと考えられるのである。」
　＊Richard Cocks（1566 -1624）：平戸にあったイギリス商館長。

また『硯縮凉鼓集』（鴨東蔌父1695年）の「新撰音韻之図」（大友・木村編輯　昭和54：25）には「変喉」の文字がみられ、この「変喉」について外山氏は次のように注解されています（外山　昭和47：246）。

「従来の「五音之図」は誤りが多いとして退け、別に「新撰音韻之図」を挙げているのであるが、それには、従来マ行と共に「脣音」に配列されていたハ行のハヒフヘホを、「変喉」の韻として配列し直している。」

　　　そこでこれらの記述から江戸時代にはいってハ行の頭子音はΦからhにかわったとみられています。ところで江戸時代末期の浮世絵師歌川広重（1797-1858）は自身の号名を「色重」としています。そこで「」がのもじりとみられることから、小松氏は当時の「広重」の発音は「[çiroʃiŋe]よりも [hiroʃiŋe] の方が、いっそう[iroʃiŋe]に近い」（小松　昭和56：252）とみて、Φi→çiではなく、Φi→hi→çiの変化を想定されました。そして「[hi]から[çi]に移行した時期は、それほど古く遡らないはずである」（注10）（小松　昭和56：253）とされました。
　さて小松氏の考えにたいする疑念を述べるまえに、無声**摩擦音の調音位置の違いを次にみておきます。**

|  |
| --- |
| **口腔前部←-----------------------------------------------------------------→喉奥部** |
| **両唇** | **歯茎** | **後部歯茎** | そり舌 | **歯茎硬口蓋** | **硬口蓋** | **軟口蓋** | **口蓋垂** | **声門** |
| **Φ** | **s** | **ʃ** | ʂ | ɕ | ç | x | ***X*** | **h** |

＊上表は一部省略してあります。
＊旧版の硬口蓋歯茎音ʃ（M. シュービゲル　1982新版：62）はIPA1989年版より削除され、後部歯茎音に名称替え（城生　1992新装増訂3版：59）。
＊ɕは現在のIPA字母表にはなく、「その他の記号」（城生　1992新装増訂3版：付表）の中にあります。

上表からわかるように江戸初期のヒ（通説はΦi）が唇音退化したとみればΦi→çi→hiの変化が自然と思われます。しかし小松氏はそのヒにたいして世界中に普通にみられる口蓋化（Φi→）hi→çiの変化を想定されました。そこでもしヒにそのような変化が起きたのであれば、çiに変化する前のhiが明治生まれの老人たちの発音に残っていてもおかしくないと思われます。しかしhiの発音は本土方言の中に全く聞くことができないのに、hiより古いΦi の発音は「髯　Fïŋe」（斎藤　昭和57：317）のように山形県最上から庄内地方にみられます。そう考えるとΦi→hi→çiよりはpi（古代）→Φi（中世）→çi（現在）の変化を考えるほうが理にかなっているでしょう。
　ではなぜは号名として「」を用いたのでしょうか。これと同趣の問題である、馬の鳴き声について書かれた「駒のいななき」という小文を次にみてみます（橋本進吉　1980：7,9,10）。

「『万葉集』巻十二に「いぶせくも」という語を「」と書いてあって、「馬声」をイに宛て、「蜂音」をブに宛てたのを見れば、（略）。「(いばゆ（嘶）」という語の「い」もまた馬の鳴声を模した語であることは従来の学者の解いた通りであろう。」

「江戸時代に入って、の『の』（巻三、第三話）（筆者補：1686刊）に、の芝居で馬の脚になった男がの歓呼に答えて「いゝんいゝんとながらぶたいうちをはねまわつた」とあるが、（以下、略）」

「の『東海道中膝栗毛』初編には「ヒインヒイン」または「ヒヽヒンヒヽヒン」など見えている」
　＊上の下線を引いた部分は踊り字（縦書き）の代用。
　＊「一九」は十返舎一九。初編は1802－1814年。

これらの文章から「馬の嘶きを「イ」で写す伝統が元禄の頃までも絶えなかった」（橋本進吉　1980：9－10）とみられ、その後馬の鳴き声はイからヒンにかわった（注11）とみられます。ところで「馬の鳴声には古今の相違があろうと思われないのに、これを表わす音に今昔の相違があるのは不審」（橋本進吉　1980:7）といえば不審です。
　そこで橋本氏はその不審さにたいして、次のように考えられました（橋本進吉　1980:8）。

「（上略）国語の音としてhiのような音がなかった時代においては、馬の鳴声に最も近い音としてはイ以外にないのであるから、これをイの音で摸したのは当然といわなければならない。なおまた後世には「ヒン」というが、ンの音も、古くは外国語、すなわち漢語（または）にはあったけれども、普通の国語の音としてはなかったので、インとはいわず、ただイといったのであろう（蜂の音を今日ではブンというのを、古くブといったのも同じ理由による）。」
　＊撥音表記のンについては省略。以下、馬声はイ・ヒで考えます。

橋本氏は上のように当時hiのような音がなかったので、馬の鳴声はそれに近い音であるイで表記されたと考えられました。しかし古今東西、馬の嘶きに違いはないとすれば、古代の馬の鳴き声も現在のヒ（[çi]）に近い音であったと考えるのが自然でしょう。つまり古代人はその天を切り裂く馬声を現在のヒ（çi）に近い音として聞いたために、それをイで表記したと考えられるでしょう。

説明がややこしいと思われたかもしれませんので、筆者の考えを図式化すると、次のようになります。

|  |  |
| --- | --- |
|  | 古代　　中世　　　　江　戸　時　代 　　　　現在 |
| 頭子音ヒの音 | pi----→Φi------→Φi -------→ çi-------→ çi |
| 該当時代のイの音 | ***Çi***---------------→***Çi***----------→i---------→i |
| 天を切り裂く馬声（表記） | ***Çi***（イ）---------→***Çi***（イ）---→***Çi***（ヒ）---→***Çi***（ヒ） |
| 「」/「」 | ***Çi***roʃiŋe/çiroʃiŋe |

＊Φiは通説による。ç：無声硬口蓋摩擦音（/ç/）。
＊馬声と古代のイは音相が近かったと考え、その音を仮に***Çi***としました。

上表には広重と号名の「色重」の発音も付記しておいたので、「広重」の号名が「色重」であったことと、馬声が古代から江戸後期近くまでイで表記されたこととは同趣であることがわかってもらえると思います。つまり江戸後期のヒの発音はçiであり、それとは別にヒに近く聞こえるイ（***Çi***）があったために馬声をイで写し、「広重」の号名に「色重」を用いることができたのです。

では çi（ヒ）に聞きなされたイの音とはどんな音だったのでしょうか。それを考えるために、次節では「声立て」の違いについてみてみることにします。

1. 「声立て」の違いとは何か

「声立て」とは聞きなれない言葉ですが、声の出し初めを「声立て」（注12）といい、次のように分類されます（服部　1951：28）。

「Sweetは呼気段落の頭の母音における聲の始め方を‘gradual beginning’<ゆるやかな聲立て>と‘clear beginning’<はっきりした聲立て>とにわけ,前者は,聲門が息の状態から次第に狭められて聲が發せられに至るもので,英語その他の諸國語に普通にみられる聲立て,後者は,聲門がすっかり聲のための位置をとってから呼氣が送られて,急に聲が始まるもので、ドイツ語の母音の聲立てがそれであるとし,兩者ともに強めが母音において始まるが，その入りわたりが強められると，前者においては母音の前に[h]を生じ，後者においては[ʔ]が生ずるとしている（原注7）。日本語の（東京方言など）の聲立てはむしろはっきりした方だが, ドイツ語や琉球語のように強い[ʔ]が普通聞こえない。（以下、声止めは省略）」

このような声立ての違いは本土方言の語頭に次のようにみられます（柴田　1978:716－7）。

「東京方言の「朝」と京都方言の「朝」とを比べると、アクセントのちがい以外に、この音（筆者注：声門閉鎖音/ʔ/）があるかないかのちがいがある。

東京 [ʔasa]

京都 [asa]

この性質は東京語だけでない。岩手県の宮古市方言などは、東京語と比べものにならないほど、はっきりした、強い声門閉鎖音が聞かれる。東京語では、この音の聞こえないこともあるが、宮古市方言では必ず聞こえる。（以下、略）」（注13）。

また東京方言などの声門閉鎖音は次のような特徴があります（国立国語研究所編　昭和51：30）。

「（首里方言の例は略）標準語の場合は,語頭の「ア（#a）」「イ（#i）」「ウ（#u）」「エ（#e

）」「オ（#o）」はふつう声門破裂音に先立たれている。たとえば「犬（#inu˺）」は〔ʔi˹

nɯ〕,「音（#oto˺）」は〔ʔo˹to〕」のようにふつう発音される。（略）「山犬」「物音」のように複合語の途中に来ると〔ya˹mainɯ〕〔mo˹noo˹to〕のように声門破裂音は消失する。したがって, 標準語の話し手は声門破裂音の有無に関して無関心なのである。他のすべての本土方言の話し手もやはり無関心である。」

このように東京方言には語頭母音の前に声門閉鎖音がみられるのですが、意味の違いには関係しません。しかし「首里方言では,母音および半母音の前に声門破裂音〔ʔ〕原注4）があるかないかによって単語の意味が違ってくる。」（国立国語研究所編　昭和51：29）のです。

首里方言では声門破裂音の有無による音韻的対立は次のようになっています。

|  |  |
| --- | --- |
| ゆるやかな声立て | はっきりした声立て |
| 語例 | チェンバレン | 沖縄語辞典 | 語例 | チェンバレン | 沖縄語辞典 |
| － | － | － | 上る | AGAYUNG | ʔaga=juɴ |
| 八重島/岳 | YĒMA-JIMA | ’eedaki | 藍 | YYĒ | ʔee |
| 枝  | YIDA | ’ida | 犬 | ING | ʔiɴ |
| 私の | WĀ （WANG） | ’waa- | 豚 | WĀ | ʔwaa |
| 居る | WUNG | ’uɴ | 植える | WWĪYUNG | ʔwii=juɴ |

＊ゆるやかな声立ての左項は山口編　2005：-,309,310,305,306。同右項は国立国語研究所編　昭和51　2005：-,185,264,587,577。
＊はっきりした声立ての左項は山口編　2005：239,313,259,304,307。同右項は国立国語研究所編　昭和51　2005：103,183,255,581,585。

＊「声門破裂音が伴う場合を子音音素ʔがあるとし, 声門破裂音が伴わない場合を子音音素’があるとする」（国立国語研究所編　昭和51：30）ので、その違いを「はっきりした声立て」と「ゆるやかな声立て」として区別しました。

上表をみればわかるように首里方言にははっきりした声立て（ʔ）とゆるやかな声立て（’）の違いがあることがわかります。そこではっきりした声立て（ʔ）からゆるやかな声立て（’）への変化を考えると、東京方言では首里方言にあるはっきりした声立て（ʔ）が消失しはじめていて、ゆるやかな声立て（’）へ変わる途上にあり、それにたいして京都方言ではすでにはっきりした声立て（ʔ）が消失してしまっていて、ゆるやかな声立て（’）になっているとみることができるでしょう。

このはっきりした声立てからゆるやかな声立てへの変化をこれらの3方言で比較すると次のようになります。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 首里方言 | 東京方言 | 京都方言 |
| ʔと’が対立する----→ | ʔはみられるが、ʔと’は対立しない---→ | ’のみみられる |

＊ʔ：はっきりした声立て。’：ゆるやかな声立て。

さてさきほどの馬声の問題に戻ります。上のような「声立て」の違いを声門閉鎖音（/ʔ/）の有無とみて、喉頭化母音イ（ʔi）から単純母音イ（’i）への変化を考えます。また現代の我々がヒヒン（çiçiɴ：撥音ɴは省略し、以下、çiで）と聞いている馬声は古今東西その違いはないとみられ、天を切り裂く馬声は古代人にとってもçiに近いものとして聞かれていたことでしょう。また‘はっきりした声立て’の喉頭化母音 ʔiは‘ゆるやかな声立て’の単純母音’iとは音相が違いçi（ヒ）と似ています。そこで古代天を切り裂く馬声はçiの音相に似ていたためにイ（ʔi）で表記されたと考えることができるでしょう。そしてイの音がʔiから’iに変化したため、古代にはイ（ʔi）で表記された天を切り裂く馬声はイでは表記できなくなりました。また中世のヒ（Φi：通説）もその後çiに変化したため、馬声の表記はイ（ʔi）のかわりにヒ（çi）が用いられるようになったのです。つまり古代のイがçiの音相に近いʔiであったため、天を切り裂く馬声はイの文字で表記されたと考えることができるでしょう。

筆者の考えをわかりやすいように図式化すると、次のようになります。

|  |  |
| --- | --- |
|  | 古代　　中世　　江　戸　時　代　　　　現在 |
| イの音の変化 | ʔi-------------→ʔi-------→i---------→i |
| ヒの音の変化 | pi----→Φi---→Φi------→çi--------→çi |
| 馬声（表記） | ***Çi***（イ）------→***Çi***（イ）--→***Çi***（ヒ）--→***Çi***（ヒ） |
| 「色重」と「広重」 | ʔiroʃiŋe/çiroʃiŋe |

＊ヒの音の変化は通説（pi→Φi→çi）による。
＊çiに聞きなされた馬声を仮に***Çi***で表記しました。馬声の語末のン（撥音ɴ）は省略。

このように江戸時代後期までイは単純母音のi（＝’i）ではなく、声門閉鎖音をともなった喉頭化母音の ʔiであったため、馬声と同じく広重（çiroʃiŋe）は自分の号名として音相の似ている「色重」（ʔiroʃiŋe）を使うことができたのです。

1. ハ行頭子音はどんな特徴をもっていたのか

タ行の語頭と語中には次のような違い（注14）がみられます（小松　昭和56:134）。

「メモ用紙のような紙片を唇のすぐ前に持ってきて、「タカイ」「カタイ」と言ってみると、「タカイ」の[ta]では、出た息のために紙片が揺れるが、「カタイ」の[ta]では、その紙片がほとんど動かない。（以下、略）」

上の観察から語頭のタでは気音が強く、語中では気音が弱いのがわかります。そしてこのような気音の強さの違いはカ行にもみられるので、気音の強弱の差を有気音と無気音の違いとみると、「高い」を[t‘akai]（以下、thakaiで代用）、「硬い」を[k‘atai]（以下、khataiで代用）と表わすことができるでしょう。そしてカ・タ行の語頭と語中にみられるこのような違いは古代のハ行にもあったとみて、古代のハ行頭子音に破擦化（注15）を考えると、現在のハ行頭子音はpa→pha→pΦa→Φa→haのように変化したと考えることができるでしょう。

そこでカ・タ・ハ行の語頭と語中の違いを次のように考えることができるでしょう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 語頭 | 語中 |
| カ | ***k***a→kha | ka |
| タ | ***t***a→tha | ta |
| ハ | ***p***a→pha→pΦa→Φa→ha | pa→Φa→wa/ɦa |

＊破擦音化については注15 。ただし、ハ行音の変化は通説によっています。
＊「母」：[haɦa]（M. シュービゲル　1982新装版：96）。
＊ɦ：有声声門摩擦音（/ɦ/）。古代のカ・タ・ハ行頭子音は仮に***k***/***t***/***p***としました。

1. 擬声・擬態語のpは継続的に存在したのか

擬声・擬態語の語頭子音pについて考えます。たとえば「ひよこ」（[çijoko]）は「語源説ヒヨヒヨと鳴く子の義〔俚言集覧・和訓栞（以下、書名は略）〕」（日本大辞典刊行会編　昭和50：17巻175）とあるように、擬声語ヒヨに指小辞のコがついてできた語とみられます。そうみると一般語である「」の語頭のpはp→Φ→çのように変化したとみることができるでしょう。そこで一般語の「雛」の語頭のçと擬声語ピヨピヨの語頭のpの違いから、語頭のpに「実際に起こったのは、p>Φという全面的移行ではなく、左図（筆者注：下図）のような分裂であったと推定される。」（小松　昭和56：269）と小松氏は述べられています。

p---┬p-― 擬声語・擬態語

　　└Φ― 一般語

　そこで「このような語（筆者注：擬声・擬態語）における[p]の子音は、文献時代以前から日本語の中に継続的に存在したもので、復活の時期というようなことは問題にならないといってよい」（小松　昭和56：269）とみる考えがでてきます。この擬声・擬態語のpは古代以来変化せず、継続的に存続してきたという考えは一見なるほどと思えるのですが、やはり疑念もわいてきます。
　『日葡辞書』（1603年）にみえるpで始まる擬声・擬態語をみてみると次のようなものがあります（土井ほか　1980：478－9）。

「**P**字で始まる若干の副詞

**A**の前の**P**

**PAppato**.パッパト
**Pararito**.1,**fararito**パラリト．または,ハラリト
**Pararito vchicuzzusu**.原注1) パラリトウチクヅス

**Patto**.パット

**Paxxito**.パッシト
　　**I**の前の**P**

**PInpin**.ピンピン

**Pixxito**.ピッシト
　　**O**の前の**P**

**POnpon**.1,**poponto**原注1).1)ポンポン．または,ポポント

**Poppoto**.ポッポト

＊語釈・ひらがな・例文などは略。

『日葡辞書』は「本篇が25,967語,補遺が6,831語」（土井ほか　1980：外題11）という大辞書ですが、pで始まる擬声・擬態語は上にみるように8語（全9語）しかみられません。そこで疑問がわきます。p（パ行）で始まる擬声・擬態語は現在多く存在するのに、なぜ『日葡辞書』にはたった8語（全9語）しかみられないのでしょうか。もし擬声・擬態語のpが古代以来継続的に存在したのであれば単に語頭にp音が残るというのではなく、語頭がpで始まる擬声・擬態語もまた残るとみるべきでしょう。ところで古代にも語頭がpの擬声・擬態語が存在したと思われますが、それらの擬声・擬態語は使われなくなって消滅し、『日葡辞書』の時代までに8語まで減少したのでしょうか。それとも鄙に隠れて存在しつづけた擬声・擬態語が『日葡辞書』の時代以後に顕在化したため、pで始まる多くの擬声・擬態語が現在みられるようになったのでしょうか。『日葡辞書』に擬声・擬態語がたった8語しかみられないことから、擬声・擬態語のpが古代以来継続的に存在したとみることには疑念がわいてきます。

『日葡辞書』には次のような擬声・擬態語がみられます（土井ほか　1980：208, 478,50,-；229,-,55,-；-,479,56,-；227,-,-,228；-,-,-,253）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 清音 | 半濁音 | 濁音 | 一般語 |
| ぱらりと | Fararito←--- | ---Pararito--- | →Bararito | － |
| ぴくぴくと | Ficuficuto ← | （Picupicuto） | →Bicubicu | － |
| ぴんぴんと | － | PInpin-------- | →Binbito | － |
| ぴかぴかと | Ficaficato←-- | （Picapicato）------------→ | Ficari（） |
| ぴよぴよ | － | （Piyopiyo）--------------→ | Fiyoco（） |

＊－印：『日葡辞書』に記載なし。（　）は推定、『日葡辞書』の綴りにあわしました。

＊F：通説では両唇摩擦音のΦ。
＊（　）の擬声・擬態語は現代語（ひらがな）でしめした。

＊Pararitoには擬音語（パラリトの意）と「また,すべて,余すところなく」の二つの意味（土井ほか　1980：478）があり、Fararitoは「すべて,あるいは,すっかり」（土井ほか　1980：208）、またBararitoは「すべて,すっかり」（土井ほか　1980：50）の意。

上表に「ぱらりと」はFararitoとPararito、またBararitoがみられるのでPararito→Bararito（連濁）、Pararito→Fararitoの変化を推定できるでしょう。また「ぴくぴく（と）」にはFicuficutoとBicubicu がみられてもPicupicuto はみられません。そこで「ぴくぴくと」の古音をPicupicuto と想定すれば、「ぱらりと」同じようにPicupicu→Bicubicu（連濁）、またPicupicuto→Ficuficutoの変化を考えることができ、そのような変化が起こることでPikupikutoは消滅したとみることができそうです。同じようにPInpinを「馬がひどく蹴り跳ねるさま」とみればPInpinto→Binbito（注16）の連濁が想定できます。また「Ficaficato.ヒカヒカト（ひかひかと）副詞.光があたって物がきらめき輝くさま」（土井ほか　1980：227）とあり、このFicaficatoと現在のçikari（「」）とは同源語とみられます。このFicaficatoもPicapicatoからの変化とみられ、そうであるなら一般語のçikariと同じようにp→Φの変化をしたとみられるでしょう。このようにみてくると擬声・擬態語のpも一般語と同じようにp→Φの変化をしたとみられるのではないでしょうか。また現在「ぴかぴかと」はあっても「ひかひかと」（ΦikaΦikato→çikaçikato：通説による）はみられません。すると現在の「ぴかぴかと」は鄙に隠れて生きのびてきて、ΦikaΦikatoは現在までに消滅したことになりますが、これはおかしくないでしょうか。ここでも「擬声・擬態語にはpが残存する」という考えには疑念がわいてくるでしょう。

中世になると促音のあとのハ行音がパ行音に変化しています。次にこの問題を考えることにします（小松　昭和56：279）。

「引き張る----→ひっぱる（引いて）
搔き払う------→かっぱらう（掻いて）

差し引く------→さっぴく(差いて）」

＊「Fiqifaru,Fipparu,Saxifiqu,Yoppiqu」（土井ほか　1980：238,236,564,828）。

＊以下、Fは通説のΦに変えます。

また「よつぴいて」は鎌倉時代成立とみられる『平家物語』の地の文に次のようにでてくるそうです（小松　昭和56：281）。

「与一、を取つて〔弓ニ〕つがひ、よつぴいてひやうど（＝ぴゅっと）放つ　（巻九）」

　上の「よっぴいて」は形容詞「良し」の連用形「良く」と「引きて」が結合してできた語とみられますが、古典文法では「形容詞連用形にはウ音便しか認めておらず、促音便を起こす」（小松　昭和56：281）とする考え方があります。そこでこのような反文法的な「よっぴいて」の存在は「促音便が、自然な仮定を経て起こった音韻変化ではなく、促音の持つ表現効果をねらって起こしたものだ」（小松　昭和56：281）とする説明がみられます。しかしこの「よっぴいて」も自然な音韻変化から生まれた言葉としてみることはできないのでしょうか。
　『日葡辞書』の**Yoppodo**には次のような記述があります（土井など　1980：828）。

「**Yoppodo**.1,**Yoqifodo**.ヨッポド.または,ヨキホド（よつほど.または,よき程）大方・あらまし（例文省略）†また,都合よく・ほどよく（以下、略）」

　＊「よい程（ほど）⇒よき（良）程」（日本大辞典刊行会編　昭和51：20巻52）。

上の記述から「ヨッポド」は形容詞連体形の「良き」と「ほど」が結合し、促音便形の「よっぽど」が生まれたと考えられます。また「買ヒ＋テ」は関西方言ではウ音便の「かうて」、東京方言などでは促音便の「かって」に変化しています。そこでウ音便と促音便の先後を勘案して、形容詞連用形の「良く」と「引きて」がウ音便を起こして「ようひいて」に、その後当時の都の「民衆の生きたことばづかい」（小松　昭和56：281）として促音便の「よっぴいて」が現れたとみることができるのではないでしょうか。このように考えれば「よっぴいて」の出現を促音の持つ表現効果をねらって起きたとみることはまちがいといえるでしょう。

ここでイ・ウ音便と促音便の関係を表にしておきます。

|  |  |
| --- | --- |
| 動詞連用形＋終止形 | 動詞連用形＋テ |
| 促音便 | 差し＋引く→ | さっぴく | イ音便 | 差シ＋テ----→ | さいて（注17） |
| 引き＋張る→ | ひっぱる | ウ音便 | 買ヒ＋テ----→ | こうて |
| 促音便 | かって |
| 形容詞連体形＋ほど | 形容詞連用形＋動詞連用形＋テ |
| イ音便 | 良き＋ほど→ | よいほど | イ音便 |  |
| ウ音便 |  | ウ音便 | 良く＋引きて→ | ようひいて |
| 促音便 | 良き＋ほど→ | よっぽど | 促音便 | よっぴいて |

＊「差いて」：「差して」のサ行イ音便。
＊ここではイ音便とウ音便の先後を含めた「イとウの相関」については省略します。

ところで一般語の「引き張る」はΦikiΦaruからΦipparuのように促音便化したとみられていますが、なぜΦipparuのように変化したのでしょうか。音声学的に難しい破裂音化（Φ→p）（注18）はなぜ起こったのでしょうか。

1. ハ行転呼音の変化を疑う

ハ行語中尾におこる転呼音の変化（注19）にも疑問があります。まず通説を次に紹介します（小松　昭和56：292）。

「平安時代中期以後、語頭以外のハ行音が、ワ行音に変化したことに起因している。すなわち、

貝　kaΦi＞kawi＞kai　　　　　　苗　naΦe＞nawe＞nae

今日　keΦu＞keu＞keo＞kjo:　　 塩　ʃiΦo＞ʃiwo＞ʃio

という過程で、まずそれらはいったんワ行音になり、そのあとで、それぞれに変化して今日にいたっているのである。（以下、省略）」

＊上の変化をp→Φ→w/Vと略記します。

『日葡辞書』には「母」は次のように記されています（土井ほか　1980：196, 213）。

「**Fafa**.l,**faua**.　ハハ．または，ハワ（母）　母．」

「**Faua**.　ハワ（母）母親．（略）」

また戦前東京の下町で育った秋永氏（昭和3年生まれ）は子供時代の思い出として次のような一文を書かれています（秋永　1990新装版：84）。

「（略）母の腰巾着で文楽に行くと『菅原伝授手習鑑』の中であったかしきりにハワサマを連発するので、子供心にも昔は（筆者補：「母」を）ハワと言ったんだなあと納得したことだった。」

少し時代を遡り、1516年の『後奈良院御撰何曽』（注20）の中に「母には二たびあひたれども父には一度もあはず　くちびる」（外山　昭和47：194）の謎があります。この謎の趣向は「母には二たび」を「唇は二度」とみることにあると思われます。そこで新村出氏は謎の解が「唇」であることから、当時のハハはΦaΦa（あるいはΦawa）であったと考えられました。しかしこの見事な謎解きにも問題があります。両唇摩擦音Φは唇をまるめて息を発する音で、またワは「軟口蓋接近音のɰa」（城生　1992新装増訂3版:81)で、ともに上唇と下唇を丸め接近させるといえても、上唇と下唇が「アフテ」といえるかは微妙な問題です。つまりこの謎は謎立ての作者がΦaやɰaにたいして「上下唇が合う」（注21）と考えていたと仮定すれば、橋本氏のように解ける謎といえるでしょう。
　またこの謎の解「唇」から当時の「母」がΦaΦa（あるいはΦawa）であったと推定するには「当時のハ行音がΦである」とする他資料からの確言が必要とみて、鈴木氏は次のように述べておられます（鈴木　昭和59:308）。

「（前略）卑見では、このなぞを単独で、当時のハ（行）音が唇音であったことを証明する強力な資料として使うことは、なぞ解きという観点から言えば、むずかしいのではないかと思う。」（注22）

　ところでハ行転呼音は江戸時代の「ハワ」（通説ではΦawa）から現在の「ハハ」（[haɦa]；M.シュービゲル　1982新装版：96）に変わっています。そこでこの「ハワ」から「ハハ」への変化にたいする亀井氏の考えを、秋永氏は次のようにうまくまとめられています（秋永　1990新装版：85）。

「（略）俗な形として、Fafaが生き続けたことなどから、十五世紀ごろの人たちはおそらくハワと発音したろうけれども意識の反省としては同音のくり返しであろうとされる。更に（亀井：筆者補）氏はその「同音反覆の語形成に対する記憶の伝承」がFaFaのかたちの復活を許したであろうとされる。」

このように亀井氏は中世に存在したハハ（ΦaΦa）とハワ（Φaua）のうちハワはこの世から消え去り、記憶として伝承され鄙に生き延びたハハ（ΦaΦa）が復活してhahaに変化したとみられました。しかしここで疑問になることがあります。田舎やあるいは人々の精神の内奥にΦaΦaが生き続けたのであれば、そのΦaΦaはどこにどのようにして隠れて生きてきたのでしょうか。中世のΦaΦaが鄙に生き続け、そのΦaΦaが復活してhahaになったという考えは魅力的ですが、場当たり的な説明ではないでしょうか。しかし何よりも疑問となるのはΦaΦaのその後の変化です。現在の「母」はhaɦaで、転呼音のハは有声声門摩擦音のɦaです。そこで亀井氏のようにpapa（古代）→ΦaΦa（中世のΦauaはその後消失）→haɦa（現代）と考えるとしても、鄙に生きのびたΦaΦaがhahaではなくhaɦaに復活したのはなぜなのでしょうか。この疑問は鄙に生きのびたΦaΦaが記憶の伝承によって復活したとする考えを疑わしめるものでしょう。またp→Φ→w/Vの変化にも疑問があります。『日葡辞書』にFauaがみられることから通説ではpa→Φa→waの変化を考えています。しかし口に出してみるとわかるようにwaのほうがΦaより口のまるめに力が必要です。もしハが「唇のゆるみ」でワに変化したというなら、wa→Φa（注23）は自然でしょうが、口をより強く閉じる必要のあるΦa→waの変化は難しいでしょう。

1. 「母」の変化を考えなおす

前節では頭子音p→Φの変化を認めたうえで、その後の転呼音の変化にたいする疑問をみてきました。ところで通説ではpから変化したΦはその後、頭子音はh（注23）、転呼音はwのように違った変化をしたと考えられています。しかしなぜ頭子音と転呼音の変化は違ったのでしょうか。

この問題を考えるために、奈良時代のア音について、次にみてみることにします（有坂　昭和30：381－2）。

「阿加賀佐多陀那良（筆者注：アカガサタダナラ、以下も同じ）諸類に於ては第二十七轉一等（â）の文字が最も多く、波婆麻和（ハバマワ）四類に於ては第二十八轉一等（uâ）の文字が最も多く、邪（ザ）類に於ては第二十九轉三等（ḭa）夜（ヤ）類に於ては同轉四等（ḭa）の文字が最も多い。この中和類に合口の文字のみ用ゐられてゐるのは、その頭音{w}をあらはすためであり、夜類に拗音の文字のみ用ゐられてゐるのもその頭音をあらはす方法に拘束されるからである。（略）平安朝以後と同じく、やはり{a}類の母音に終るものであつたらうと思はれる。」

＊âは歌韻開口1等韻で、後舌広母音のɑ（/ɑ/）。uâは戈韻合口1等（ua）。aは麻韻開口2等韻で、前舌広母音のa（/a/）。ワは戈韻合口1等ɦua。ヤは麻韻開口3・4等韻のḭa。

＊『日本書記』α群のア列の推定音（注24）は韻類分布表（森博達　1991:22の表3）に。

次に奈良時代のハの表記をみてみます（上代語辞典編修委員会編　1985（4刷）:585,206,589）。

語頭のハ　 　　「」（「花」：記仁徳）

語頭以外のハ　 「・」（「川」：記仁徳）

＊「母」：「」（万三五三九）（注25）。

このようにハは語頭・語中を問わず「波」で表記されていて、そこに違いはみられません。
　ここで『切韻』（唐寫本切韻残卷）（注26）と『広韻』によって歌韻と戈韻の関係をみてみます（有坂　昭和30：271）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 平声 | 上声 | 去声 |
| 『切韻』（唐寫本切韻残卷） | 歌 | 哿 | A |
| 『広韻』 | 韻鏡内転27開 | 歌 | 哿 | ***箇*** |
| 韻鏡内転28合 | 戈（波） | 果（跛） | ***過***（播） |

＊A：残卷なく不明。
＊韻鏡27・28転には入声なし。去声の***箇***・***過***は筆者補（藤堂・小林　昭和46:80）。
＊（　）内の例字は藤堂・小林　昭和46：80より。
＊内転27開には歌・哿・箇韻字なし。

ここから第4節で紹介した『在唐記』の「皆加唇音」にたいするを考えます。
　第9節でみたように「」は「」のように促音便化していますが、室町時代の抄物に次のような例がみられます（外山　昭和47：229）。

「和語など本来の形の中に促音を介入させた形が、かな抄物などを中心に多く現われる。
　ヤツハリ（『史記抄』）　ヤツホリ（『四河入海』）　「やはり」から（以下、3例省略）」

＊『史記抄』：桃源瑞仙著1477年。『四河入海』：笑雲清三編1534年。

このように中世の抄物にΦの促音便化がみられるのは事実ですが、音声学的に難しいΦ→pの変化はなぜ起こったのでしょうか。しかしここで少し立ちどまって考えなければなりません。なぜならこの疑問はハ行頭子音がp→Φの変化をしたことが前提になっているからです。当たり前のことですが、ハ行頭子音がp→Φのように変化していなければΦ→pの変化がなぜ起こったかと問う必要もないからです。
　そこでハ行頭子音の変化を考えなおすことにします。外山氏が「この時代（筆者注：17世紀初め）軽い歯音的要素が日本語のハ行子音にあったのかも知れない」（外山　昭和47：196）と疑念をだされました。そこで当時の唇音は唇歯摩擦音のfや両唇摩擦音のΦではなく、fに聞きなされた、fもどきの唇音***F***（注27）だったと考えてみます。また中世には擬声・擬態語や抄物などにΦ→p（通説）とみられる促音便化が起こっています。そこでその促音化が起こるために、この***F***はpや通説のΦ、またpΦでもなく、ある不明のpもどきの閉鎖音PXであると考えなおします。そしてそのPXが語頭ではPYに、語中尾では転呼音のPZに変化したと考えると、ハ行の頭子音はp→PX→PY、転呼音はp→PX→PZのように変化したと考えることができます。そしてこのPX（通説のΦ）→pの変化を可能ならしめるために、中国語の介音のアイディアを援用し、これらのPX・PY・PZは介音X・Y・Zをもったpx・py・pzであったと考えなおします。そうすると語頭のハはpa→***F***a（＝pXa）→ha、また転呼したハはpa→***F***a（＝pXa）→ua（＝pZa）のように考えることができるでしょう。そして奈良時代の本郷波字音は幫母戈韻合口のpua（注28）であったとみられるので、この介音uをu（/u/）ではなく、uもどきの***U***と考えなおします。そしてpXaをuもどきの***U*** の介音をもったp***U***aと考え、p***U***aが***F***aに変化し、その後語頭のhaと転呼音のUaに変化したと考えなおしてみます。

このように考えたハの変化を通説と比較すれば次のようになるでしょう。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  |  | 語頭 | 語中 |
| ハ | 通説 | pa→Φa→ha | pa→Φa→wa |
| 私案 | p***U***a→***F***a→ha | p***U***a→***F***a→Ua→wa |

＊p***U***a：奈良時代の本郷波字音。

＊***F***a：平安時代以後の「ハ」（『在唐記』の本郷波字音や『日葡辞書』・コリヤードのfa）。

＊Ua：現在のワの前身（『日葡辞書』のua）。

上のような変化を考えると、奈良時代のp***U***aから変化した『在唐記』の本郷波字音***F***a（ただし、ある種の両唇閉鎖音）は梵音pよりはその破裂性が弱かったとみれば、『在唐記』の「本郷波字音・・・皆加唇音」の記述をうまく解釈することができるでしょう。「皆加唇音」にたいする筆者の新しい読みとは『在唐記』の本郷波字音をある種の両唇閉鎖音***F***aと考えることです。

次に「母」の変化をp***U***ap***U***a（「波播」）→***F***a***F***a（ハハA）→***F***aUa（ハワ）→haɦa（ハハB)のように考えます。すると（以下、ローマ字は通説）ΦaΦaはΦawaに変化し、そのΦawaは世間から消え去り、そのかわりに鄙に隠れて生き残っていたΦaΦaがhahaとして復活したという、亀井氏の考えは***F***a***F***a（ハハA）→***F***aua（ハワ）→haɦa（ハハB)の自然な変化として説明できるでしょう。
　では上のp***U***aや***F***a（ある種の両唇閉鎖音）はどんな音だったのでしょうか。

1. ハ行語頭と語中の変化は違ったのか

ここまで2016年1月12日作成のhagyuonのファイルの記述を行きつ戻りつしながらハ行音の変化にたいする疑問の数々について考えてきました。
　ここでそれらの疑問を箇条書きにまとめると、次のようになります。

イ．ハ行頭子音の変化（p→Φ→h）に対する疑問

A．『日葡辞書』のfは無声両唇摩擦音（/Φ/）だったのか→第3節

B．頭子音はpV→ΦV→ha,çi,Φu,he,hoと変化したのか→注23

C．頭子音のヒはpi→Φi→hi→çiと変化したのか→第6節

D．擬声・擬態語のpは古代以来継続的に存在したのか→第9節

ロ．ハ行転呼音の変化（p→Φ→w/V）に対する疑問

F．転呼音はp→Φ→w/Vと変化したのか→第10節
「母」はpapa→ΦaΦa→hawa→hahaと変化したのか→第10節

ハ．ハ行語頭音と語中音の変化に対する疑問

G. 平安時代以後、なぜ頭子音と転呼音の変化は違ったのか→当12節

＊それぞれの疑問については矢印（→）で示した節で考察しました。
＊これまでの20年間の考察は過去の各更新ページ（注29 ）をみてください。

　上にあげたようにハ行音の変化にたいしては多くの疑問が存在します。またハ行頭子音は唇音退化してΦになった（北原　1997：47）、転呼音は「母音の間にはさまれた両唇摩擦音の[Φ]の緊張がゆるくなって[w]に変わったもので、いわば労力の経済である。」（秋永　1990新装版：82）といった説明がなされています。しかしこれらの「唇音退化」や「唇の弛み」といった説明は単に通りのよい言語学の用語で説明したにすぎなく、ハ行音の変化を解きあかしているとはとてもいえないでしょう（注30）。
　ところで上の多くの疑問はつまるところ「G. 平安時代以後、なぜ頭子音と転呼音の変化は違ったのか」という疑問に集約できるでしょう。筆者もハ行の頭子音と転呼音の変化がΦ→h/wのように違ったとずっと思ってきました。そのため「頭子音と転呼音の変化が違った原因は何か」と20年近く考え続けてきたのです。ところが11節までの記述を行きつ戻りつ校正をしていた3月6日にハ行頭子音と転呼音の変化は違っているのではなく、違っていないことに気づいたのです。平安時代初期のハ行頭子音をΦとみることには疑念がだされているとはいえ、「母」の表記がハハからハワへと変わったのはまぎれもない事実です。また『日葡辞書』で「ハハ」がFafa、また「ハワ」がFauaと表記されていることに疑いはないとみるなら、「ハ行頭子音と転呼音の変化は違っていなかった」という筆者の言明はとてもにわかには信じていただけないでしょう。しかしこの一見とっぴな信じがたい言明はこれまでの通説を破棄する、全く新しい世界中で誰も考えつかなかったすばらしいアイディアなのです。そこで筆者の考えを理解していただくためにそのアイディアを説明することにします。

古代から現代まで「母」の表記は「波播」（注25）→FaFa（＝ハハ）→Faua（＝ハワ）→ハハ（＝[haɦa]）のようにかわっています。そこで『日葡辞書』のFauaや仮名表記の「ハワ・はわ」に目をつぶり、さらに現在のhaɦaの無声hと有声ɦの違いを無視します。そうすれば「母」は古代以来現在までずっとハの同音反復（注31）をくりかえしてきたとみることができるでしょう。そこで「」と「」が連濁して「」となるように、ハと同音のハが結合した「母」にも同じように連濁が起きたと考えてみます。すると倭人伝時代のpapaが奈良時代の「波播」、その後『日葡辞書』のFafa（ハハA）になり、さらに連濁してFaua（ハワ）になり、そのFauaは連濁して現在のhaɦa（ハハB）になったと考えることができるでしょう。つまり「母」（papa）は古代よりずっと唇音退化を続け、連濁することでその形を変えつづけ、現在のハハ（haɦa）になったのです。このようにハ行転呼が起こった原因を連濁であると考えれば「ハハA」→「ハワ」→「ハハB」の変化も自然とみることができるでしょう。亀井氏のように「ハハA」から変化した「ハワ」は消滅し、鄙に生きのびた「ハハA」が「ハハB」に復活したという、とてもありそうもない先祖返りを考える必要もないでしょう。

ここまでハ行音の変化にたいする常識をくつがえす考えを述べてきましたが、それでもまだ筆者の考えには半信半疑という思いをもたれるでしょう。そこで2週間ほど前に思いついた「梅干し」のたとえを使って、筆者のアイディアをもう一度説明することにします。

同じ土地の同じ木から同じ時に採取された2個の梅干しXとYが2000年の時を越え、同じ甕のなかで同じ条件で保存されてきたと考えます。そしてその当時の人々によって梅干しXとYの状態が記録され、それらを記録した紙切れが現在まで保存されてきたと考えます。
　その保存されてきた紙切れには次のような文字が書かれています。

①　　　　②　　　　　③　　　　　　 ④　　　 ⑤

　　　　 古代　　　奈良時代　平安時代初期　 　17世紀　　現在

梅干しX：pa------→波-------→Fa-----------→Fa------→ha

梅干しY：pa------→波-------→Fa-----------→ua------→ɦa

＊pa：ハの古代推定音。☐内は保存されてきた紙きれに書かれている文字。

　＊梅干しXとYの変化がわかるように矢印をいれてあります。

梅干しXとYの①②③の時代の紙切れにはpa→波→Faの文字がみられます（その変化も→印で書きそえます）。そこでこれらの文字は梅干しXとYが時とともに同じように変化してきたことを示しているとみられます。しかし④の時代の紙切れにはFaとuaと全く違った文字が記録されているので、梅干しXとYは③の時代以後変化が違ってきたのではないかとみられます。さらに⑤の時代（現在）ではhaとɦaとなっているので、④の時代以後はまた同じような変化をしたのではないかとみられます。そこで疑問が起こります。梅干しXとYは①②③の時代までは同じように変化し、④の時代にはFaとuaのように違って、また現在ではha とɦa と変化（の結果）にはさして違いがないようにみえるのはなぜでしょうか。2000年を越える時のなかで、梅干しXとYはなぜこのような不思議な変化をしたのでしょうか。

この謎を解くために梅干しXとYのすぼみ具合と塩ふき具合を考えます。もちろんここでは譬としての梅干しを考えているので、梅干しのすぼみ方と塩ふき具合とのあいだの科学的な関係は不問にします。梅干しXとYは③の時代までpa→波→Faのように同じように変化してきたので、④と⑤の時代（現在まで）も同じように変化したと考え、その変化は梅干しXとYのすぼみ具合と考えます。次にそれとは別に梅干しXとYの塩ふき加減を考え、それをA（梅干しX）/A（梅干しY）のように表わすことにします。
　このように考えた梅干しXとYのすぼみ方と塩吹き加減は次のように考えることができるでしょう。

①　　　　 ②　　　　③　　　　　　 ④　　　 ⑤

　　　　　　　　 古代　　　奈良時代　平安時代初期　 17世紀　　現在

梅干しのすぼみ方 :pa------→波-------→Fa----------→Fa------→ha

梅干しの塩吹き加減:A/A ----→B/B------→ C/C---------→Fa/ua---→ha/ɦa

　　＊梅干しXとYのすぼみ方は同じとみます。　　　　　　（D/***D***）　 （E/***E***）

ここで現在の梅干しXとYの塩吹き加減をみるとhaとɦaになっています。またɦa（有声声門閉鎖音/ɦ/）はha（無声声門閉鎖音/h/）の有声音であることから、⑤の時代（現在）の梅干しXとYの塩吹き加減を上表のE/***E***（***E***はEの有声音）のように考えなおします。すると①②③の時代まではA/A,B/B, C/Cのように梅干しXとYの塩吹き加減に違いはなく、⑤の時代はE/***E***（無声と有声）の違いとみることができるでしょう。そして④の時代にも梅干しXとYの塩吹き加減の違いがFaとuaのようにみられるので、④の時代の塩吹き加減の違いを上表に書いたようにD/***D***（***D***はDの有声音）と考えます。そうすると梅干しXとYの塩吹き加減の変化はA/A→B/B→C/C→D/***D***→E/***E***のように考えることができるでしょう。このように2個の梅干しXとYの塩吹きは現在まで連綿と続いており、その時々の塩吹き加減の違いはA/A,B/B,C/C（無声対無声）とD/***D***,E/***E***（無声対有声）の違いとみることができるでしょう。

ここで唐突ですが、「」と「」が「」になる連濁の原因を入りわたり鼻音ɴ（注32）と考えます。
　すると次のような変化を考えることができます。

「」+ɴ+「」→yamaɴtori→yamaɴdori→「」

＊ɴ：連辞（村山　昭和48：210）。ɴ：入りわたり鼻音。

そこで⑤の時代（現在）の塩吹き加減の違いhaとɦaに次のような関係を考えることができるでしょう。

（ha→）ɴha→ɴɦa→ɦa
　＊ɴ：入りわたり鼻音。h：無声声門閉鎖音（/h/）。ɦ：有声声門閉鎖音（/ɦ/）。

先に梅干しXとYの塩吹き加減の変化はA/A,B/B,C/Cの「無声対無声」からD/***D***,E/***E***の「無声対有声」にかわったとみました。そこで梅干しXとYの塩吹き加減の変化を梅干しXは無声のままであり、梅干しYは無声から有声にかわったとみれば、梅干しXは連濁せず、梅干しYは連濁したとみることができるでしょう。また梅干しXとYは時とともに同じようにすぼんできたとみられるので、そのすぼみ方を唇音退化、また塩吹き加減を連濁の有無と考えれば、梅干しXとYのそれぞれの変化を次のように考えることができるでしょう。

　　　　　①　　　　 ②　　　　　③　　　　　　　④　　　 　　 ⑤

　　　　古代　　　　奈良時代　　平安時代初期　　17世紀　　　　現在

梅干しX：なし（pa）→なし（波）→なし（***F***a）----→なし（***F***a）---→なし（ha）

梅干しY：なし（pa）→なし（波）→なし（***F***a）----→Ua（ha）-----→wa（ɦa）

＊左項は梅干しの塩吹き加減（連濁の有無）。右項の（　）内は梅干しのすぼみ方（唇音退化の進み具合）。
＊④時代の（ha）はこのあと説明します。先のFa,uaは***F***a,Uaにかえました。

ここから奈良時代以後の「母」の変化を考えます。「母」の表記は波播→Fafa（ハハA）→Faua（ハワ）→haɦa（ハハB）のように変わっています。また「母」は万葉集に波播の表記がみられ、その中古音は次のように推定されています（藤堂　小林　昭和46：80）。

「波」：幫母戈韻平声合口1等pua。
「播」：幫母過韻去声合口1等pua。

＊「母」は「「波播」（万三五三九）」（注25）（上代語辞典編修委員会編　1985第4刷：589）。

そこで梅干しXとYをp1***u***aとp2***u***aと考えなおし、XYのように結合した梅干しp***u***１ap***u***2a（「母」）を考えます。またこの梅干しXYは梅干しXとYの遺伝子（変化）を受け継いでいると考えます。そうすると梅干しp1***u***aとp2***u***a（「母」）は時とともにすぼみ、それとともに塩吹きもはじまり、時を経てハハA（***F***1a***F***2a）に変化しました。そしてハハA（***F***1a***F***2a）はさらにすぼみ、塩吹きも激しくなり「ハワ」（***F***1aUa）になりました。そしてその後もすぼみつづけ、塩吹きもますますひどくなり、ついに現在のハハB（haɦa）になりました。そこで梅干しXとYの遺伝子（変化）を受け継いでいることから梅干しp1***u***aとp2***u***aのすぼみ具合は同じ（唇音退化のスピードは同じ）で、それと対照的に、塩のふき加減はp1***u***が連濁しないのに、p2***u***aは連濁するという違いがあるとみることができるでしょう。

そこで梅干しp1***u***aとp2***u***a（「母」）の変化を図式化すれば次のようになるでしょう。

|  |  |
| --- | --- |
|  | 奈良時代　　平安時代初期　　17世紀　　現在 |
| 「母」表記の変化 | 波播-----→ハハA---------→ハワ-----→ハハB |
| 『日葡辞書』の表記 | （Fafa）　　　　（Faua） |
| 「母」の変化 | p***u***ap***u***a----→***F***aɴ***F***a----------→***F***aɴ***h***a-----→haɦa |

＊「波」「播」：ともに「pua」（藤堂　小林　昭和46：80）。そこでp***u***aと考えます。
＊「Fafa/Faua」（土井ほか　1980：196）。「［haɦa］」（M. シュービゲル　1982新版：96）。

＊***F***a:日葡辞書の唇歯摩擦音fもどきの唇音。ɴ***h***a：連濁したワ（ワの前身）。

＊ɴ：連濁を起こす原因である連辞（村山　昭和48：210）の後身である、入りわたり鼻音。

「母」の変化を上のように考えれば、頭子音と転呼音の変化は連濁以外には違いはなく、「なぜ頭子音と転呼音の変化は違ったのか」と問う必要もないでしょう。そのかわりにp***u***aや***F***a、また連濁したワ（ハの連濁）であるɴ***h***aとは何か、ある不明の鼻音ɴとは何かといった数々の新しい疑問がでてくるでしょう。
　これらの問題については11節までの考察とは違う見方で、次回考察していく予定です（注33）。

　　　　　　　　　　2018年5月24日　ichhan

【注】

1. 語頭のp、たとえば「針」は「八重山石垣方言parï/宮古平方言piï/奄美喜界島志戸桶方言pai」（中本　1976：428）のように琉球各地に、また語中のpは首里方言の「sipukaramuɴ⓪（名）塩からいもの。」（国立国語研究所編　昭和51：481）などの語に残っています。

2．フの新しい変化については國廣氏の次の観察があります（國廣　1983:88）。

「普通は唇を近づけて摩擦音を出す[Φɯ]というふうに発音するが、四～五年前（筆者注：1970代終わり頃か）にはじめて気がついたのだけれども、これをのどの奥で[*X*ɯ] （筆者注：*X*は無声口蓋垂摩擦音）で発音する東京育ちの若い人がいることに気がついた。」

3．「ハ行子音がh音化している。たとえば,「花」なら, Φを通らずにpから直接hに変化したと考えられる。老人層にはpをとどめる者があるが, Φは見られない。このような方言は,池間と,これから分村した伊良部島佐良浜,宮古島西原に限られている。（以下、略）」（中本　1990：223）。

4．「陶宗儀の言語は呉方言であり、呉方言はその特色として古來淸、次淸と濁とを明瞭に區別する（略）」（有坂　昭和32：580）ことから、有坂氏は「A又近B」を全清・次淸A

と全濁B（あるいはその逆）の対立ではないかとみられた（有坂　昭和32：580‐1）ので、中・下段のように表にしました。

5．「軽唇音化」とは：

唐代北方音では、「中古三等韻のうちで非前舌主母音をもつ韻類の唇音が、唐代になって重唇音（筆者注：p）から軽唇音（筆者注：f）に変化したという。」（森博達　1991：112）これを「軽唇音化」（<唇音の軽重分離>）といいます。

「『切韻』（601）の反切においても, <脣音の軽重>はなお分離されておらず,北方洛陽長安に拠ったと思われる『玄応音義』（661）も『切韻』と変わることはない。従って唐初においてはこの現象はまだ普遍化していたとは考えられない。ところが, 『慧苑音義』（720頃,於長安撰）においては,その反切上字は脣音の軽重を分離して混じない。それ以後,たとえば『慧琳音義』（784撰述開始）等で分離して扱われていることは言うまでもない。」（水谷　昭和42：110）。また『日本書紀』の「α群の仮名は単一の字音体系（唐代北方音）に基づいている」（森博達　1991：v）とみられています。

6．木田氏の「p音続考」には平安時代初期のハ行頭子音をΦではなく、pとみる諸説の論文名（木田　平成元年：428）がみられます。また淸瀬義三郎則府氏の「平安朝波行子音p音論」（淸瀬　平成3：162－179）もでています。

7．「久高方言のハ行子音はpF（筆者注：両唇破擦音pΦ）とpʔとが明確に区別される。pFは軟音であり,pよりもFに近く聞こえる。これと無気喉頭化音とが対立するわけである。　その語例はつぎのとおり。

[pFuɴ]（骨）　[pFuiɴ]（掘る） [pFi:]（屁）

[pʔuɴ]（舟）　[pʔuiɴ]（降る）　[pʔi:]（火）」（中本　1976：299）。

＊ɴ：nの右側の止めをまるめたn字（口蓋垂鼻音/ɴ/）の代用。

　　またこの「pΦは聴覚的には破裂音とも摩擦音ともつかないほど,唇の閉じ方がきわめてやわらかい破裂音である。その習得はたいへんむつかしい。」（中本　1990：231）。沖縄北部の「安田（筆者補：方言）のpは破裂がきわめてやわらかくΦにいれることも可能な発音である。これはp→Φの中途のすがたであろう。」（中本　1990：211）。

8．pʔ（無気喉頭化音）とp（無気音）・ph（有気音）・pΦ（破擦音）の対立は次のようにみられます（服部 1951：85,84；中本 1976：299,307；中本 1990：221；中本 1976：214；中本 1990：225）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | pʔ（無気喉頭化音） | p・ph（有気音）・pΦ（破擦音） |
| 喜界島方言 |  | 呼氣がそれほど弱くないのに、（略）破裂音も弱い |
| 方言 |  | 呼氣が弱く,氣壓が弱く,（略）出わたりの破裂音も弱い　 |
| 久高島方言 | pFとpʔとが明確に区別される | pF（=pΦ）は軟音であり,pよりもFに近く聞こえる |
| 伊江島方言 | イ段において,p→tの変化 |  |
| 宮古島方言 | イ段はpsに,ウ段はfに変化 | ハ行子音がh音化している。 |
| 八重山石垣方言 | ïは強い気音による摩擦噪音をともなうのが特徴 |  |
| 与那国祖納方言 | イ・ウ段音節では無気喉頭化音を新しく生じた | ア・エ・オ段でh音化 |

＊阿伝方言：「[p‘ana]<鼻>の[p‘]（筆者注：有気音ph）は呼氣がそれほど弱くないのに,閉鎖はそれをしっかり食止めるように營まれず,閉鎖した唇が次第にふくれ氣味となり,したがって口むろ内の氣壓はあまり高まらず,破裂音も弱い.特に持續部において兩唇の間から呼氣が漏れれば兩唇摩擦音の[Φ]になるような音である。（略）」（服部　1951：85）。

＊与那嶺方言：「[p‘ana:]<花,鼻>」（服部　1951：84）。

＊久高島方言：「pΦaku（箱）」（中本　1990：212）。また「（2）有気音のpΦがある。このp音は閉鎖から破裂へ移行するとき,口腔の呼気圧が極度に弱い。したがって破裂のきこえが弱く, Φに近く聞こえる。口もとを見ないとΦと思ってしまうほどである。」（中本　昭和58：49）。

＊伊江島方言：「ハ行子音は,イ段でnini:（耳）,kudi（首）,tʔidʒi（肘）のように唇音が前口蓋音に変化する現象が起こり（略）」（中本　1990：215）。
＊平良方言：「ハ行子音は,狭母音のイ・ウ段で緊張を帯びた音声に変化した。すなわち,イ段では強度の摩擦音をともなうpsに,ウ段ではpfを経てf（筆者注：唇歯摩擦音/f/）に変化している。fは強い摩擦噪音をともなった緊張音である」（中本　1990：221）。

＊祖納方言：「イ・ウ段音節では,後続音節に吸収されて脱落し,その脱落個所に無気喉頭化音を新しく生じた。（中略）tʔu:（人）,tʔai（額）（以下、例省略）」（中本　1990：225）。

9．このようなpの舌音化（p→t）はベトナム漢字音にもみられ、「越南漢語では,3等唇音字は唇音のままであるが,4等唇音字は舌音化する。従って唇音のみについては,中古漢語の3等と4等の区別の記憶が保存されていると言えよう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| ＜韻目＞ | ＜3等唇音＞ | ＜4等唇音＞ |
| 脂韻系 | 媚眉[mi] | 比妣琵毘[ti] |
| 宵韻系 | 表[bieu] | 標[tieu] 妙[zieu] |

＊引用（ただし、2例のみ）は上表まで（藤堂　1980：217）。

10．小松氏は「各地の方言を調査すると、変化の過渡期にあるさまざまの状態を見いだすことができるので、変化の具体的過程を推定することが可能になる。そういう研究を言語地理学、ないし方言地理学という。いまの問題はそういう方法を導入して解決することが望ましいが、さしあたりその資料がないので（略）」（小松　昭和56:253）とされましたが、各地の方言のなかにヒの変化を解く鍵は本当にないのでしょうか。

11．馬の鳴声をヒまたはヒンとしたのは橋本氏によれば『落窪物語』（10世紀末頃の成立か：筆者補）の「ひゝときて〜」（橋本進吉　1980：9）とみえるのが最も古いそうです。そしてこの「ひゝ」は「（略）その他の諸本におけるごとく、「いう」とある方が当時の音韻状態から見て正しいのではあるまいかと思われる。（略）「いう」はヒンではなく、むしろインにあたるのである。」（橋本進吉　1980：9）とみられました。

12．「声立て」「声止め」は文法書や日本語入門書に紹介されることがありません。そこで長くなりますが次に引用します。

A.「声立て」（日本音聲學會編　1976:326）

「解説（略）声立てには次の4種類がある。1）柔らかい（又は緩慢な・又は徐徐の）声立て　gradual beginning,der leise Einsatz. 2）明瞭な（又は固い・又はきっぱりした）声立て（clear beginning; check glottid,der feste Einsatz.　3）気息的声立て。4）圧縮された声立て。声立てのメカニズムは声門開閉と呼気上昇との関係によって説明される。即ち声門閉鎖と呼気上昇とのタイミングが合った時が「柔らかい声立て」であり「明瞭な声立て」である。（両者の違いは呼気圧の強さと声帯の緊張度とによる）。（以下、合わない時の3・4の声立てについては省略）」

B.「声止め」（日本音聲學會編　1976:327）：

「定義それまで出し続けていた声を止めることをいう。（略）「固い声止め」（＝きっぱりした声止め）と,「柔らかい声止め」（＝徐々の声止め・緩慢な声止め）との2種類がある。解説「固い声止め」は,声帯が急に固く閉じて,そこで呼気が断ち切られて,「破裂の入渉り」である声門閉鎖音[ʔ]（略して[ʔ]とも書く）〖⇒その項〗を伴うものである。これに対して,「柔らかい声止め」は,呼気が次第に弱まると同時に,声帯が次第に互いに近づいて行って,最後は軽く相触れるか,並行的に近づいた位置に来てその振動をやめるものである。日本の近畿以西の諸方言では, 柔らかい声止めで声を止める。東京語では, 自然な状態では,柔らかい声止めで声を止める。本来の東京語では,その音節・その語を取立てて発音する時や,緊張した発音では,固い声止めで声を止めるのが普通であったが,1970年ごろ以後の若い人の東京語では,緊張した発音の場合でも,柔らかい声止めを使って,最後の母音を伸ばす傾向ができた。 もとの東京語では[…go(d)zaɩmaʃịtɑʔ][deṣ], 新しい傾向の東京語では[…go(d)zaɩmaʃịtɑ:][des~~u~~:].」

C.語頭・語末の声門閉鎖音

「「あります」の末尾のsuのuは、東京方言では消えて[arimas]に近く聞こえるが、大阪方言などでは「スー」と長めに聞かれるほどsuのuがよくひびく。（改行、略）[arimasu]の場合も、末尾に続いて無声の子音があると考えれば（ときには、実際に,のどをつめる声門閉鎖音[ʔ]のあらわれることがある。すなわち、 [arimasuʔ]）（略)」（柴田武　1988：630－1）

古代、語末にɴʔ（ɴ：ある不明の鼻音、ʔ：声門閉鎖音）が存在したと考え（→注32）、江戸末期の「あります」の発音をarimasuɴʔと想定します。東京方言の語頭ははっきりした声立て（ʔ）からゆるやかな声立て（’：以下、記号は不使用）に移行しているので、語尾の声止めにも同じような変化を考えると、arimasuɴʔ→arimasuiʔ→arimasɯʔ（ɯ：平唇のウ）→arimasʔ→arimas（東京方言の老人の発音）。またarimasuɴʔ→arimasuɴ→arimasuu→arimasu:（東京方言の若者の発音・大阪方言）の変化を考えることができるでしょう。

＊ɴʔについては<http://ichhan.sakura.ne.jp/cht/tsheg.html>参照ください。

13．「東京語の歯切れのよさはもう一つ、母音で始まる単語の前に、声門閉鎖音の聞かれることがある、ということである。声門閉鎖音というのは、ゴホンと咳をするときの、最初の、のどがしまるような感じがする、あの音で、ドイツ語で、母音で始まる単語の前に来る音であることは、すでに述べた。」（柴田　1978:716）
　＊この後、第7節p15の「朝」の東京方言と京都方言を比較する文章につづきます。

また「（5）「一本」「安易」のような語頭母音は、特に東京などでは声立てが固く、声門閉鎖を先立てて発音されることもある等と対立する。」（城生　1977：127）

14．「東京方言でも條件によって氣音の強弱が異り,[kata]（肩）の[k]は[naka]（中）の[k]より氣音が強く,後者は氣音が全くないこともある。」（服部　1951:138）。また中国人の「黄氏の観察によれば、語頭ではいずれも有気音に聞こえるが、「語中に来る場合、/k/の気音がもっとも強く、/t/の気音がもっとも弱く、/p/はその中間ぐらいのようである」と指摘している。」（森博達　1991：101）

＊http://ichhan.sakura.ne.jp/kaline/kaline1.html

15. pの破擦化は次のように考えられます（M.シュービゲル　1982新版：96－7）。

無気閉鎖音（/p/）　　有気閉鎖音（/p‘/）　 破擦音（/pΦ/）　摩擦音（/Φ/）

（p--------------→）ph------------------→pΦ------------→Φ

＊「pΦaku（箱）」（久高島方言；中本 1990:212)。
＊有気閉鎖音athaと破擦音atsaの音の近さはカイモグラフ第18図bのathaとdのatsa(M.シュービゲル　1982新版:70)によってわかります。

16. Binbitoには「物を少しずつ,ちびりちびり吸うさま」と「馬がひどく蹴り跳ねるさま」（土井ほか　1980：56）の二つの意が、PInpinは「家畜が蹴り跳ねるさま」（土井ほか　1980：479；ただし、擬声語のヒンヒンは記載なし）。またヒヒンを擬声語とみるのは「駒のいななき」（橋本進吉　1980：5－10）に。芭蕉の編んだ発句あはせ「貝おほひ」（1672年刊）にみえる「むかふ駒の足をはぬるやひんこひん」（亀井　昭和59：438）を「馬の跳ねる足の様子を写した擬態語」とみるのは「お馬ひんひん」（亀井　昭和59：437－445）に。

17．「「差いて」は共通語で音便形をもたないが、古い文献には「さいて」が普通に見られ、また方言にも保存されている。（以下、略）」（小松　昭和56：279）。たとえば「平安初中期　石山寺蔵　守護国界主陀羅尼経古点　下クタイて　臥（フ）イ（て）」（馬淵　昭和46：84）。
　また「（4）サ行イ音便の諸相の中、所謂特殊イ音便話イサ形の存在は、今の所、滋賀県各地・大阪府各地（中略）で報告されている。（略）」（奥村三雄　1978：613－4）。

18．『古今和歌集』（『在唐記』より少し後、平安時代初期）巻19の俳諧歌に「うめのはな 見にこそ来つれ うぐいすの ひとくひとくと いとひしもをる」（亀井　昭和59：145）とあります。この鶯の鳴き声「ひとくひとく」の音連鎖をp-t-k（ピーチク）とみて、この歌は「る」をかすっていると読み解き、そこから平安時代初期の鶯の鳴き声のヒが（ただちにハ行頭子音がpであるとはいえないが）piであったろうと推測されました（「春鶯囀」；亀井　昭和59：141－153）。しかし当時の一般語のハ行子音はpではなくΦとみられています。そこで通説のΦとみられる唇音をある不明の閉鎖音P（注27参照）と考え、p（古代）→P（平安時代初期：通説はΦ）→p（現在）のような変化を考えると、俳諧歌にみえる「」はPitoku（亀井氏はpitoku）をかすっっているとみることができるでしょう。

19．「奈良朝時代のものには「宇流斯」（記中巻）「宇流之等」（萬葉巻二十）の如く常に波類の假名を用ゐてあらはされてゐるのであるが、（以下、略）」（有坂　昭和30：575）、語中のハがワに転呼したのは「上代の中央語の例は確実でないが、個別的にはウルファシ（麗）がウルワシとなった例が最も早く、平安初期（九世紀初）の訓点資料にはすでに見られるし、（中略）体系的な変化がほぼ完了したのは十二世紀までかかるよう」（秋永　1990新装版：82）です。

20.「群書類従本の『後奈良院御撰何曽』の祖本が天理図書館所蔵の『なぞたて』で」（吉見　2013：4）、その「『なぞたて』よりも四年早い永正九年（一五一二）成立の豊原統秋『体源鈔』（同書：6）があります。また「天理本『なぞたて』の当該の謎々の祖型が約六〇年早い『聖徳太子伝』の写本」（同書：10）です。

21．『謳曲英華抄』(二松軒1771年)に次の記述があります（岩淵　昭和52：350）。

「はひふへほの仮名は柔かに脣を合て後開くなり初より脣を開きて唱へずふ脣ノ内如此此ふ文字を心に持て唱ふ也之を濁とも三重濁り共いふまた脣をく合せて開けば脣ノ外是を半濁と云」

上の「柔かに脣を合て後開く」、また「ふ文字を心に持て唱ふ」の記述から『日葡辞書』当時のハ行子音はΦであったとみられそうです。また二松軒が記述する「唇ノ内外」も心蓮（1181没：第4節）の観察と同じように唇を合わせる場所による違いとみられます。またΦは唇が接近するだけで上下の唇は合わないのですが、二松軒は「脣を合て」と記述しています。そこで二松軒にしたがってΦは「脣を合て」と考えます。そして「脣ノ内外」を唇を合わせる場所の違いとみると、Φとm/p（「脣ノ外」）とにはさして違いはみられません。そこで「脣ノ外」（m/p）と対比すべき「脣ノ内」をΦとみることは難しいでしょう。そこで『謳曲英華抄』の軟濁をΦとみることには疑念がわくでしょう。

22．吉見氏が鈴木氏の考えを次のようにまとめられています（吉見　2013：3）。

「「ハ（行）」の頭子音が両唇摩擦音であると仮定してこの謎々を解き、その解を以て「ハ（行）」の頭子音が両唇摩擦音であることの証拠とするのはトートロジーであり、論理として無効だということである。銘記しておくべき発言である。」

天理本『なぞたて』の「はゝには二たひあひたれとも（改行）ちゝには一ともあはす（改行）　くちひる（原注一一）」の「あひたれ」を「上下の唇が」とみるのが定説です。しかし「唇が」のではなく、「歯はの意、父は乳の意にて」（同書：2－3）と「歯々」が「唇に」とみる本居内遠（ただし、この謎は『後奈良院御撰何曽』）の説があります。つまりこの謎を新村氏のように解くためには「唇に」ではなく、「唇が」とみる前提が必要でしょう。また天理本『なぞたて』には全編にわたって一切濁点は付されていない」（同書：4）ので、唇の「アヒ」を上下の唇が確実に合う有声両唇閉鎖音のbとみて、上の謎を「婆には二度会ひたれども爺には一度も会はず」（同書：4）と読むようなこともできると、吉見氏はみられました。

23．頭子音の変化（通説：pV→ΦV→ha,çi,Φu,he,ho）についても疑問があります。橋本萬太郎氏はハ行音をha,çi,Φu,he,hoではなく、「ṾV」(Ṿ：無声化母音、V：母音)とみるべきとされ、次のように注意されています（橋本萬太郎　1981:214)。

「ハ[ha]、ヒ[çi]、フ[Φu]、ヘ[he]、ホ[ho]（改行）と記述される。ところが、この記述が、インド・ヨーロッパ語の音韻組織（とそれを表現する文字）によって高度にバイアスされたものであることに、われわれは、どれほど気がついているであろうか。」

そこでハ行頭子音のh/ç/Φの音相に違いはない（橋本萬太郎　1981:215の第29図）のであれば、フはΦuにとどまり、ハ・ヒ・ヘ・ホがΦuからha,çi,he,hoのように各々違った変化をしたと考えるのは間違いといわねばならないでしょう。そこである不明の唇音Fを考え、FV（F：注21の「ふ文字を心に持て」の音）から直接現在のハ行（ṾV：通説のha,çi,Φu,he,ho）に変化したと考えるのがよいでしょう。

24．『日本書記』の「α群では、「マ」（と、〔麻三〕韻のヤと少数の説明可能な例外：筆者補）を除いて、〔麻二〕韻つまり前舌母音[a]を一切用いていないのである。（略）上代「ア列」母音の性格が非前舌の広母音であったことまで物語っている。」（森博達　1991:24）。

25．「はは【母】（名）母。「がに…」（万三五一九）「を頼みにひぬ」（万三五三九）（筆者注：駿河国の歌：三三五九の誤り）「…となも念ふ」（二五詔）（中略）「嫗母也、波々はは、又乎波ヲバ、又与女ヨメ」（新撰字鏡）「母、為レ妣、波波はは、日本記私記云、母以呂波イロハ、舎人曰、（略）」（和名抄）（以下、略）」（上代語辞典編修委員会編　1985第4刷：589）。

26．『切韻』（陸法言序601年）「193韻は,唐代に増補されて,『唐韻』という名で写本として流布し」（藤堂　昭和42：39）」、「増訂の最後のものとして、北宋の大中祥符元年（1008年）,陳彭年らが勅命によって撰定した『大宋重修広韻』（略してふつう『広韻』）が現われ」（平山　昭和42：114）ました。

27．Fもどきの唇音について：

17世紀初頭ハ行子音が「fとh の中間の音」（コリヤード　昭和9：6）であると記述されて以来、江戸末期になっても「ヨーロッパのモスコー,ライプチッヒ,ワーテルローなどの大陸の人達は,FかそれともHか？という問題に直面したが（略）」（クルチウス　昭和46：22）という状態でした。またクルチウスの『日本語文典例証』にホフマン自身が補筆した記述に次のようなものがあります（クルチウス　昭和46：23）。

「注意深く調査してみると,ハ、ヘ、ヒ、ホの子音という特殊な音を完全に表わすのはfでもhでもなかった。GOLOWNINは言う原注１）。（筆者注：以下、ヒ音についての記述）日本人が発音するのを聴くと,fi,chi（＝和蘭語のhi）,psi,fsiと聞こえ,歯の間を通って発音されるように思われる。（中略）MEYLANは（略）“日本人はF,H,PH,Vの音を同時に表わす一つ文字を持っているが,しかしこの文字は,これらの四つの音を正しく表わさない。外国人のうちで,一人でもこの音をまねることのできる者がいるとは,私は信じない原注2）。」

＊MEYLAN：オランダ商館長。「1827－30年のあいだ出島に滞在」（クルチウス　昭和46：23）。
＊GOLOWNIN：ロシア艦隊司令官で、『日本幽囚記』の著者。

＊クルチウスは最後のオランダ商館長で、最初の領事。

＊ホフマン（J.J. Hoffmann1805-1878）やクルチウス（J.H.Donker Curtius1813-1879）の伝記・業績などは雨宮編　昭和48：22－34に詳しい。

このようにヘボン式ローマ字でha/hi/fu/he/hoと表記されるハ行子音は17世紀にはコリヤードがf、コックスはfやhと表記していました。また江戸末期においてもホフマンはハ・ヘ・ヒ・ホの子音はfやhではないとしており、またヒはGOLOWNINはfi,chi（＝和蘭語のhi）,psi,fsiと聞こえ、MEYLANはF,H,PH,Vではないといっているように難しい発音だったようです。そこで中世のハ行子音をfではない（もちろんΦでもない）fもどきのFとみるのは理にかなっているでしょう。

28．歌韻と戈韻の違いについては「切韻に於ても、廣韻の歌哿箇韻に相當する文字と戈果過韻に相當する文字とは、反切の韻字に於て區別されてゐるのであるから、兩者の間には切韻時代から既に何處か違った點が有つたものでなければならない。（略）その區別はどうしても開合の點に求めるより外にしやうが無いのである。」（有坂　昭和30：291）と考えられています。また韻鏡では歌韻字はなく戈韻字のみが記載されている（藤堂・小林　昭和46：78,80）ので、もともとp***U***aであった歌韻が戈韻（pua）として顕在化（分離）したとみれば、本郷字音はpuaに近い音であったとみることができるでしょう。

29.ハ行音の変化についての以前の考察は以下のホームぺージを参照ください。

[http://ichhan.sakura.ne.jp/paline/paline1.html～paline14.html](http://ichhan.sakura.ne.jp/paline/paline1.html%EF%BD%9Epaline14.html)

http://ichhan.sakura.ne.jp/rendaku/rendaku9.html,rendaku10.html,rendaku14.html,rendaku15.html,rendaku16.html。

通説については奥村　昭和47：113-5,126-130や外山　昭和47：194-8など。

30．ハ行音の変化にたいして「両唇を合わせる運動が徐々に弱まり、ついには全くなくなってしまうという方向、つまり唇音退化の方向をたどっているのである。これは、日本語の音韻変化に認められる。一つの顕著な傾向である。」（北原　1997：47）との考えが入門書にみられます。「しかし、唇音退化というのは、そういう方向で音韻変化が進行した場合について、結果をそのように呼ぶだけのことであって、決して、音韻変化の必然的方向などというものではない。」（小松　昭和56：264）との指摘は心すべきでしょう。つまりハ行音の変化（通説：p→Φ→h,p→Φ→w/V）をたんに唇音退化や唇のゆるみと説明するのではなく、それらの変化がなぜ起こったのかを説明すべきでしょう。たとえば「唇音性の弱化というひとつの現象が、語頭では音声変化に留まり、語中ではワ行との合流という音韻変化につながったと見るわけである。（以下の語例は筆者補：[pana]＞[Φana]（花）（改行）[kaba〜kaβa]＞[kawa]（川）」（高山倫明　2012：41）という考えはたしかに一つのアイディアでしょう。しかし転呼音の変化を「母音間でハ行子音が[β]（筆者注：Φの有声音）であってこそ、わずかに摩擦がゆるむだけで[w]に転呼しえたのである」（高山倫明　2012：41）と説明するのは問題でしょう。小松氏がいわれるように日本語のハ行音に両唇のゆるむ必然性はないでしょうから、両唇の摩擦がゆるむ原因こそ問うべきでしょう。

31．ハハがハワに変化した原因を「同音反復」（亀井　昭和59：208）、あるいは「〔-F→-W〕という連濁の一種」（外山　昭和47：113）とした記述はみられます。しかしこれらの「同音反復」や「連濁」といった記述は語頭のハと語中のワが違っていることを疑うことなく書かれたもので、筆者の「ハワのワはハの同音反復（ワはハの連濁）である」とする考えとは似て非なるものです。

32．中国語の清声と濁声（濁音ではない）をC（C：無声子音）と***C***（***C***：Cの有声子音）であるとみる考え方がカールグレン以来通説となっています。それを受けて上代日本語の清音と濁音をk/t/pとg/d/bとみる考えがあります。しかし現在では清音と濁音を無声音と有声音の対立とはみないで、「この前鼻音（筆者注：下記の井上氏の入りわたり鼻音に相当するもの）こそが濁音を特徴づけるもの、すなわち弁別的特徴であるとする考え方もある（早田輝洋1977a,1977b）」（高山　2012：31）との認識がすこしずつ増しているようです。また東北方言の祖語の子音体系は「/p t s k（清音）（改行） 〜b 〜d 〜z 〜g（濁音）（略）/（改行）清音系列と濁音系列の弁別的特徴は入りわたり鼻音の有無であり、この意味では濁音系列を/〜p 〜t 〜s 〜k/と表してもいい位だった。（略）」（井上　2000：431－2）との考えがあります。上の早田氏とこの井上氏は前鼻音（入りわたり鼻音）の存在が清音（C）にたいする濁音（N***C***）の弁別的特徴とみられています。しかし上古（中古）中国語の清濁（次濁）を***Nʔ***C（鼻音+声門閉鎖音+無声子音）と考えることで、上代日本語の濁音もNʔC（N：入りわたり鼻音, 入りわたり鼻音+声門閉鎖音+無声子音）と考えることができるでしょう。このように考えると中世に万葉仮名の濁音表記が消え去り、かわりに清濁の区別のない仮名表記があらわれ、その後濁音表記が現れた（***Nʔ***C→NC→***C***：ただし、N（入りわたり鼻音）は***N***の後裔）ことを矛盾なく説明できるでしょう。また呉音・漢音の違いは***Nʔ***C→Nʔ→N（マ・ナ行：呉音。例：「」）/ ***Nʔ***C→NC（遣唐使の聞いた濁音）→***C***（バ・ダ行：漢音。例：「」）（藤堂　1980：169－170）とみられます。中国語音韻学者でさえまだ気づいていない、中国語の清濁（次濁）を***Nʔ***Cとみる考えをここではじめて公開しましたが、今はこれにとどめ、後の更新で詳しく考察します。
　＊ɴʔについてはhttp://ichhan.sakura.ne.jp/cht/tsheg.html参照ください。
　＊連濁・濁音についての諸説は『日本語音韻史の研究』（高山2012）にみられます。

33．じつは前節（11節）の続きに「12．ワの音を考える」のテーマで、倭人伝にみえるワの対音表記（「倭」・「和」）、また中期朝鮮語を対訳した『鷄林類事』（12世紀）にみえる「虎曰監蒲南切（改行）（原注一）ᄫᅥᆷ（以下、略）」（前間　昭和49：210）、さらに『朝鮮板伊呂波』（1492年）・『捷解新語』（康遇聖1618成、1676年開板）・『倭語類解』（洪舜明編1783-88年刊)などにみえるウ・ワの表記についても考察していました。しかし今回いままでとは全く違ったアイディアを考えついたので、「12．ワの音を考える」は省略します。

【引用書など】

秋永一枝（1990：新装版）「発音の移り変り」『日本語講座　第6巻　日本語の歴史』　阪倉篤義編　大修館書店

雨宮尚治編（昭和48）『西洋人の日本語研究　亀田次郎先生の遺稿』　風間書房

有坂秀世（昭和30）『上代音韻攷』　三省堂有

有坂秀世（昭和32）『国語音韻史の研究（増補新版）』　三省堂

井上史雄（2000）『東北方言の変遷』　秋山書店

岩淵悦太郎（昭和52）『国語史論集』　筑摩書房

大友信一・木村晟編輯（昭和54）『假　名文字使硯縮凉鼓集』（駒沢大学　国語研究　資料第一）（鴨東蔌父著　汲古書院　＊原本1695年自序・刊

奥村三雄（昭和47）「第二章　古代の音韻」『講座国語史　第2巻　音韻史・文字史』　中田祝夫編　大修館書店
奥村三雄（1978）「サ行イ音便の消長」『日本の言語学　第6巻　方言』　柴田武・加藤正信・徳川宗賢編　大修館書店

亀井孝（昭和59）『亀井孝論文集3　日本語のすがたとこころ―（一）音韻―』　吉川弘文館

木田章義（平成元年）「p音続考」『奥村三雄教授退官記念　国語学論叢』　奥村三雄教授退官記念論文集刊行会編　桜楓社

北原保雄（1997）『青葉は青いか　日本語を歩く』　大修館書店

京都大學文學部國語学國文学研究室編（昭和40）『弘治五年朝鮮版伊路波　本文・釈文・解題』　京都大學國文學會　＊明の弘治5（1492）年に朝鮮で刊行された『弘治五年朝鮮版伊路波』の複製

京都大學文學部國語学國文学研究室編（昭和49）『前間恭作著作集　下巻　龍歌故語箋・雞林類事麗言攷他九篇』　京都大學國文學會

清瀬義三郎則府（平成3）『日本語學とアルタイ語學』　明治書院

清瀬義三郎則府（平成7年8月）「再び「平安朝波行子音p音論」」『音聲学會會報』（第209号）音聲学會

國廣哲彌（1983）『ことば　東京大学公開講座37』　平野龍一代表　東京大学出版会

D.クルチウス（昭和46）『クルチウス日本語文典例証』　クルチウス著・ホフマン補筆　三沢光博訳　明治書院

国際音声学会編（2003）『国際音声記号ガイドブック―国際音声学会案内―』　竹林滋・神山孝夫訳　大修館書店

国立国語研究所編（昭和51）『沖繩語辞典』（国立国語研究所資料集5）大蔵省印刷局

[小松英雄](http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/search-handle-url?%5Fencoding=UTF8&search-type=ss&index=books-jp&field-author=%E6%9D%91%E4%B8%AD%20%E9%87%8D%E9%9B%84)（昭和56）『日本語の世界　第7巻　日本語の音韻』　中央公論社

D.コリヤード（昭和9）『コイヤード　日本語文典』　大塚高信訳　坂口書店　＊原著1632年ローマ刊

斎藤義七郎（昭和57）「10　山形県の方言」『講座方言学　4　―北海道・東北地方の方言―』　飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編　国書刊行会

阪倉篤義（昭和46）『国語音韻論』　笠間書院

柴田武（1978）「方言コンプレックス」『日本の言語学　第6巻　方言』　柴田武・加藤正信・徳川宗賢編　大修館書店

柴田武（1988）『方言論』　平凡社

M.シュービゲル　『新版　音声学入門 』　小泉保訳　大修館書店

城生佰太郎（1977）「4　現代日本語の音韻」『岩波講座　日本語　5　音韻』　橋本萬太郎ほか　岩波書店

城生佰太郎（1992：新装増訂3版）『音声学』　アポロン

上代語辞典編修委員会編（1985：4刷）『時代別国語大辞典　上代編』　三省堂

鈴木博（昭和59）『室町時代語論考』　清文堂出版

高山倫明（2012）『日本語音韻史の研究』（ひつじ研究叢書　言語編第97巻） ひつじ書房

土井ほか編（1980）『邦訳日葡辞書』　土井忠生・森田武・長南実編訳　岩波書店

藤堂・小林（昭和46）『音注韻鏡校本』　藤堂明保・小林博　木耳社

藤堂明保（1980）『中国語音韻論－その歴史的研究－』　光生館

外山映次（昭和47）「第三章　近代の音韻」『講座国語史　第2巻　音韻史・文字史』　中田祝夫編　大修館書店

中本正智（1976）『琉球方言音韻の研究』　法政大学出版局

中本正智（昭和58）「久高島の漁民語彙」『沖縄久高島における言語・文化の総合的研究　〈中間報告〉』　久高島調査委員会編　法政大学沖縄文化研究所

中本正智（1990）『日本列島言語史の研究』　大修館書店

日本音聲學會編（1976）『音聲學大辞典』　三修社

日本大辞典刊行会編（昭和50）『日本国語大辞典』（第17巻）小学館

日本大辞典刊行会編（昭和51）『日本国語大辞典』（第20巻）小学館

橋本進吉（昭和3）「波行子音の變遷について」『岡倉先生記念論文集』　市河三喜編　岡倉先生還暦祝賀会

橋本進吉（1950）『国語音韻の研究』（橋本進吉博士著作集　第4冊）　岩波書店

橋本進吉（1980）『古代国語の音韻に就いて　他二篇』　岩波書店（岩波文庫）

橋本萬太郎ほか（1977）『岩波講座　日本語　5　音韻』　岩波書店

橋本萬太郎（1981）『現代博言学』　大修館書店

服部四郎（1951）『音聲学』　岩波書店（岩波全書）

服部四郎（昭和51）「琉球方言と本土方言」『沖縄学の黎明―伊波普猷生誕百年記念誌―』　伊波普猷生誕百年記念会編　沖縄文化協会
早田輝洋（1977a）「日本語の音韻とリズム」『伝統と現代』（45号）　伝統と現代社

早田輝洋（1977b）「9　生成アクセント論」『岩波講座　日本語　5　音韻』　岩波書店

平山久雄（昭和42）「3　中古漢語の音韻」『中国文化叢書　１　言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

福島邦道（1990：新装版）「外から見た日本語」『日本語講座　第6巻　日本語の歴史』　阪倉篤義編　大修館書店

ホフマン（J.J.Hoffmann（1968）『日本語文典（英語版　初版）』　東洋文庫　1968（復刻版）
＊『A Jppanese Grammar』（Johann Joseph,Leiden　1968の復刻版）。三沢光博氏の翻訳もあります。

馬淵和夫（昭和46）『国語音韻論』　笠間書院

水谷真成（昭和42）「2　上中古の間における音韻史上の諸問題」『中国文化叢書　１　言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

村山七郎（昭和48）『日本語の起源』　村山七郎・大林太良共著　弘文堂

森博達（昭和57）「三世紀倭人語の音韻」『倭人伝を読む』　森浩一編　中央公論社（中公新書）

森博達（1991）『古代の音韻と日本書紀の成立』　大修館書店

山口栄鉄編訳・解説（2005）『琉球語の文法と辞典　日琉語比較の試み』　バジル・ホール・チェンバレン著　琉球新報社　2005

＊『Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language,1895』の完訳版。

吉見孝夫（2013）「『御奈良院御撰何曽』「ははには……」の謎々はハ行頭子音の証拠たり得るか」『語学文学』（52号）　北海道教育大学語学文学会

＊ただし、<http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/6986>から引用。

J.ロドリゲス（1993）『ロドリゲス　日本語小文典（上）』　池上岑夫訳　岩波書店（岩波文

庫）　＊原著：1620年マカオ刊。

『魏志倭人伝』（陳寿233-297年?）
＊「『三国志』「魏書」第30巻烏丸鮮卑東夷伝倭人条」の略。

『切韻』（601年）

『玄応音義』（661年）

『古事記』（720年完）

『慧苑音義』（720年長安撰）

『慧林音義』（784年撰述）

『在唐記』（円仁平安時代前期）

『古今和歌集』（紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑撰、一説に905年刊）

『悉曇口伝』（心蓮1181年没）

『雞林類事』（12世紀）

『平家物語』（鎌倉時代か）

『鶴林玉露』（南宋の羅大経1248－1252年編）

『書史会要』（陶宗儀明初洪武9（1376）年撰）

『史記抄』」（桃源瑞仙1477年）

『伊路波』（弘治５年朝鮮板1492年）

『体源抄』（豊原統秋1512年成）

『四河入海』（笑雲清三編1534年）

『日葡辞書』（1603年長崎版）

『日本語小文典』（ロドリゲス1620年マカオ）

『日本語文典』（コリヤード1632年ローマ）

『捷解新語』（康遇聖1618成、1676年開板）

『鹿の卷筆』（鹿野武左衛門1686年)
『しちすつ假名文字使蜆縮凉鼓集』（京都・鴨東蔌父1695年自序・刊）

『謳曲英華抄』(二松軒1771年)
『東海道中膝栗毛』（十返舎一九1802―1814年初編）